

# エゾマツ



2007年秋季号 82

北海道ボランティア・レンジャー協議会

## 目 次

- 1、会長の挨拶 「林分施業法」 会長 田村 允郁
- 2、特集（1） 東大演習林での研修  
・楽しかった東大演習林研修会 札幌市 簾内 道夫  
・東大演習林研修会に参加して 小樽市 大川 良祐  
・東大演習林ボラレン研修会に参加して 苫小牧市 富永まゆみ  
・東大演習林で気になったもの話 恵庭市 小林 英世
- 3、特集（2） 地球温暖化の現状  
・地球温暖化は現在進行形！ 七飯町 岡村 敏夫
- 4、各地での観察会  
・ワッカ原生花園観察会 北見市 和泉 勇  
・観察会に思うことなど 遠軽町 小栗 法韶  
・野の花たちが身近になって 札幌市 水戸 唯則  
・盆地の雑草の人生 札幌市 浅見 文貴  
・徳舜瞥一ホロホロ山登山観察会に参加して 小樽市 今 弘子
- <写真 東大演習林にて> 佐藤敏幸さん撮影
- 5、道新のスラワーソンに参加・調査  
・北海道フラワーソンに参加して 事務局長 春日 順雄  
・ 定山溪での調査
- 6、ボランティア・レンジャー育成研修会 広報部 内山 恭子  
2007 について
- 7、連載  
・記紀の仲の植物（面白い話） III 札幌市 成田 伸一  
・天塩川”百年の流れ”追って 札幌市 小泉 三雄  
・コケを訪ねて 札幌市 吉田 政徳  
・カエルのこと 苫小牧市 谷口勇五郎
- 8 紀行 知床岬 恵庭市 小林 英世
- 9、第二回役員会、今後の活動など

編集後記

# 林分施業法

会長 田村 允 郁

かつて、自然保護とは自然に一切手をつけないことだと言われた時代があり、林業と自然保護は相容れないものだとの論が持てはやされたことがありました。

今、自然保護の解釈やそのありかたは非常に多様ですが、自然保護の形には大まかに次のように分けられているそうです。

- ・保存的自然保護…自然に対してまったく人為を加えず、自然の推移にまかせる保護。世界自然遺産の核心地域や自然環境保全地域の特別区など。
- ・現状維持的自然保護…現状のままの姿を保持しようとする保護。現状を保持するため、人手を加えなければならない。
- ・保全的自然保護…自然を積極的に活用しながら、良好な状態で保たれるように管理する保護。
- ・自然回復…いったん荒廃した自然を元の状態に回復させる保護。

このような分け方を見ると、保存的自然保護だけが自然保護であるかのような考え方は特に森林において誤りであることに気がきます。

森林は、木材生産（経済的）機能と環境保全（公益的）機能をもっていることから、森林にたいして多様な機能の発揮が求められています。森林の持つ多様な機能を維持し高めていくためには森林を生態系として健全な状態で保つことが必要であるとも言われています。

ここ何年か、富良野在住の会員、南部さん、宮田さんのお世話で東大演習林での研修をおこなっています。

森林の持つ経済的機能と公益的機能は、人の取り扱い方次第で内容が変化していきますが、正しい森林管理を行えば、二つの機能とも将来に向かってより発展するとの考えから、東大演習林では「林分施業法」の研究をすすめています。「林分」とはいろいろな状態の森林を似たもの同士に分けるということであり、「施業」とは目的に添った林木を育成するために造林をし、森林に積極的に手を加えることをいいます。東大演習林のパンフレットの中に次の文が載っていました。

森林はその姿を常に変化させていきます。「林分施業法」の基本的な考え方は変わりませんが、その運用は森林に合わせて変化します。森林という様々な要素からなる集合体を人が節度を持って有効利用するには、臨機応変な柔軟性こそが重要だと考えています。

毎年、東大演習林研修会で見事な森林を見るにつけ、林業も自然保護も、共に人間が自然に働きかける行為なのであるとの視点を忘れぬことだと感じているのです。

# 楽しかった東大演習林研修会

札幌市 簾内道夫

平成19年年6月29日(金)～30日(土)に開催の研修会に今年も参加しました。平成17年から3年続けての受講です。東大演習林ということで緊張しましたが、この研修で学んだ知識や体験が貴いものとなり誇りに思います。

みなさんをご存知のように狩勝峠から眺望される「樹海」に象徴の森林・自然はあまりにも有名です。いつの日か見学したいと願望しながらも、森林の管理運営一般の方は入ることが出来ないものと自分で決めていました。

そのことからこの3年間ボラレンの研修参加で直接森の中に入れさせて頂き感無量の思いです。この研修に特別なご配慮をたまわりました東大演習林の皆さんに厚くお礼申し上げます。宮本先生には業務ご多忙のところ毎年現地の案内指導とマイクロバス(以下研修バス)の運転を頂き感謝の気持ちでいっぱいです。

6月29日(金) 研修初日 天候曇り～小雨

午前10時富良野ロープウエー集合。会員の南部さんのお世話で富良野西岳(標高1,331m)登山が計画どおり行われました。当日は霧雨の中約20名の参加者全員が頂上まで登り高山植物の観察も十分楽しめました。下りのロープウエー駅舎手前4～500m近くでしょうか、ゴンドラの中から「熊だクマだ!」との大きな声に、乗客みんなが下を見ると悠々とヒグマが通り森の中に消えました。この遭遇も得がたい貴重な研修体験いかにも北海道らしいです。麓の駐車場に戻り着いた頃は天気も晴れ上がり、麓郷の演習林宿泊棟には夕方に着きました。6時から野外のビニールハウスで、ビールで乾杯!名産のジンギスカンなどで会員の友好を深め情報の交換や楽しい話題が遅くまで続きました。

6月30日(土) 研修2日目 天候曇り～晴れ

東大演習林のプログラムによる研修と大麓山(標高1,460m)の登山が行われました。当日午前8時30分にセミナーハウス前全員集合。気温16度、標高差1,000mの大麓山頂上では10度位の気温かな?と宮本先生の予想です。研修バスの運転と現地の案内指導も宮本先生です。参加の24名全員が東京大学のネーム入りの真新しい保安帽を着用し、身もこころも引き締めて大麓山に向かいました。車は程なく演習林入り口に到着し施錠を開けて林道を進み、左右前方に原生林や森林施業の状況を眺めながら標高約1,100mの林道終点まで車で行けま

した。ここから頂上まで約1 kmの登山歩道を登りました。ウズラバハクサンチドリ、ミヤマキンバイ、ウコンウツギなど数多くの花の観察ができました。目の前でノゴマがさえずり新しい出会いのように感動。登りつめた頂上はあいにく霧のため富良野岳や、雄大に広がる大雪山系の大パノラマも見えませんでした。

頂上で20分ほど休息したでしょうか直ぐに山を下りました。登山歩道の帰りに「来年もまた会いましょう」と心の中で花たちに語りかけ、そんな贅沢を願いました。林道終点バスのところまで戻り登山歩道から頂上までの花合わせも行い、小林研修部長から40種と確認されました。そのころから霧も晴れあがり日が差し暖かくなりここで昼食となりました。

午後からは93林班（りんぱん＝森林の区画番号）で沢登りの体験です。盤の沢と聞きましたが厚い一枚岩のような感じの小沢を水が流れフキユキノシタ、オオバミゾホウズキ、ウサギシダ、カラムツソウ、ツボゴケなどがみられました。

92林班のエゾマツ倒木更新を見学しました。現在立っているエゾマツが胸高直径約70 cm推定樹齢200年、倒れているエゾマツが推定樹齢200年計400年、自然に朽ち果てたエゾマツが地表にベットのように横たわり、その上にエゾマツの種子が落ちて自然に発芽し人間の手助けをうけないで現在の樹木に成長、これを「倒木更新という」と宮本先生のお話でした。それにしても400年も経た自然界の種の継承力は不思議とも偉大とも思いました。現在ここの林分蓄積は推定1 ha当たり約300立方メートルのことで見事な自然林を形成しています。

97林班でアカエゾマツポット苗を50本植えました。もっと多く植えたかったです。植える場所は事前に整理（地ごしらえ）を終えてありました。苗木は全部自家生産、大学の樹木園で育成され苗令7年生です。

108林班でトドマツ林の枝打ちを行いました。これまでの経験を生かしみんなが枝打ち鉋を上手に使い綺麗に仕上げました。植えてから約30年経過の立派な森です。宮本先生は「ボラレン手入れの森」の看板でもあったらよいと話されたので嬉しく思いました。限られた時間内の体験も午後4時40分に作業を終えました。森づくりのお手伝いがとても楽しく参加のみんなが笑顔でした。今後も森の手入れなど体験研修に参加したいです。

研修バスも午後5時10分に、朝出発のセミナーハウスに無事戻りました。バスの走行距離115 km、運転の宮本先生ありがとうございました。

毎回この研修会で何かとお世話を頂きました会員の南部さん・宮田さんに心から感謝とお礼申し上げます。

## 東大演習林研修会に参加して

小樽市 大川良祐

天気予報では研修会の29日30日だけが悪く、その前後は良好とのことでした。29日の行事をどのように進めるのか注目していたら、小雨だったせいか、迷うことなく富良野西岳に登山開始となりました。富良野ロープウェイの山頂駅でピッケルを借用し、地元の南部栄一さんが無線、携帯電話、簡易テント、救急用品等を背負って先頭に立ち、小林英世研修部長がしんがりです。雨中ときどき霧の中の行進で遠くの景色は見えませんが、道端の花の美しさやどんな野草に出会えるのか、好奇心にひかれて知らず知らずに登っていく感じです。葉が柔らかでつやのあるツバメオモトは山頂に至るまでずっと見られ、上に行くほどだんだん小型になって行きます。オオバキスミレ、チシマフウロ、ツマトリソウ、ゴゼンタチバナに気が惹かれました。ウコンウツギの黄色い花は、受粉すると花卉が赤くなる(ハコネウツギの白い花も受粉すると赤くなる)との興味深い話を聞きました。所々に残雪もあり、立ったままの昼食も違和感なく体験しました。寒かったせいかほとんど飲料の消費はありません。ビニール製の雨具でも雨の浸透があり、帰ったら手袋だけでも雨に強いものを調達しようと思う。下山した麓近くで多くの方がヒグマを目撃したようです。残念ながら私には見えませんでした。夕食会では講師で案内役の宮本義憲先生を交えて全道各地から来たボラレンの皆さんとお話が出来、だんだん顔と名前が一致してきました。この夜のジンギスカン鍋には、南部さん提供のホルモンのほか西岳で収穫したばかりのササノコやギョウジャニンニクも入れて野趣のある食事になりました。夕食後、別棟の図書室では宮本先生の講義があり、いろいろの書籍、図鑑も閲覧することが出来ます。

翌日は運転手が宮本先生、ガイドが宮田和恵さんのマイクロバスで大麓山の1200m地点まで行き、ここから徒歩で頂上に向います。この日はガスがかかっていましたが雨は降らなかったのが何よりでした。熊野美子さんから葉がパット上に向って開いているタカネナナカマド、ウラジロナナカマド、ただのナナカマドの違いを教えてもらい、分かったような気になりましたが、そのほかにもミヤマナナカマド、ホザキナナカマドもあるようで、ナナカマドを卒業するのはまだ時間がかかりそうです。そのほかイワツツジ、シラタマノキ、コケモモ、アカモノなど似た高山植物の見分けもこれからです。昨年ここで教えてもらったオガラバナとミネカエデの花と葉の形の違いはしっかりと復習しまし

た。大麓山(1,459m)の頂上に着いたとき、南部さんから一枚羽織るようにとの注意がありました。頂上で休憩すると体が冷えてくるためのようです。頂上ではアカエゾマツの真紅のふわふわした雌花と雄花を初めて間近に見ることが出来ました。山頂標識の傍にコマクサの花が一輪さいています。人為的にこの山に持ち込まれたと思われるもので、昨年も見ましたがこれを除去することも人為的と考えて除去されずに今年咲いたようです。林道ではエゾシカや飛びたつエゾライチョウに何度も会いました。シカを食ったヒグマの糞、ナキウサギを観察している学生にも会いました。ここは多くの動物が生活できる豊かな森であることが分かります。宮田さんが匍匐前進をしながら一向に逃げ出さないエゾシカを撮っていました。きっと大きな写真が撮れたことでしょう。この後、エゾマツの倒木更新を2箇所で見せてもらいました。特に1本のエゾマツの倒木の上に、7本のエゾマツ、1本のトドマツが一例に並んでいる様子は壮観なものでした。太いもので200年はたっているとのこと。次いで大きな匂いのよい菌を掻き分けて谷川に下り、沢登りを体験しました。カラマツノウに似たチドリケマンを初めて見ました。私の図鑑にはないものでした。アカエゾマツの植林の体験では、現場に7年物の幼木の入ったポットとスコップが準備されていました。この程度の大きさになるのに7年もかかるのかと成長の遅さに強い印象を受けました。次に30年ものトドマツ林で枝打ち作業を体験しました。現場にはビニールシートの下に長短のナタが用意されています。宮本先生から林内に光を入れず湿気を保って林床の分解を進めるため、外縁部の樹は外側の枝を残して枝打ちするとの指示があり、思わず夢中になって7本ほどの枝打ち作業をやりました。終了後に、林道端で見つけたウツボグサは、小樽の塩谷丸山で見慣れているものとは違って太く立派なものでした。同じ花でも所変ればだいぶ様子が違うようです。この日、麓郷のセミナーハウスに戻ってきたのは16:30頃、全ての行事が終了しました。誰かがこの日我々を運んだワゴン車は朝から115キロを走行したと言っていました。東大演習林林道930kmの1割も回ったことになります。参加された皆さんはくたくたになりながら盛りだくさんの行事を食欲にこなしました。かなりの物好きな集団だったかもしれません。

東京大学北海道演習林での研修会は、その自然の豊かさ、充実した研修施設、快適な宿泊場所、利用料金の安さ、指導してくれる先生、地元ボラレンの支援など全てが揃っている研修会です。満足感と共に来年も来るぞと心に決めて富良野を後にしました。

## 「東大演習林ボラレン研究会に参加して」

苫小牧市 富永まゆみ

6月29日(金)～30日(土)富良野市麓郷の東大演習林セミナーハウスにて東大演習林研究会に参加しました。

一日目は富良野西岳登山です。

新富良野プリンスホテルの奥に富良野ロープウエーの山麓駅があり、登山口からロープウエーに乗り登山開始。

降り到着寸前、山のすそ野にヒグマの姿を発見！ゴンドラの中で皆さん？（私が）大興奮！！

お天気は・・・あいにくの雨でザックにカバーをかけたかっぱも着用意OKのはずが、下山後、荷物を整理してみればザックの中はびしょ濡れで財布の中のお札も濡れているという有様でした。

西岳では、エンレイソウ、ヒメナツトウダイ、ミヤマキヌタソウ、ムラサキヤシオ、ツバメオモト、ミツバオウレン等が雨に濡れながらも可憐な姿で私たちを歓迎してくれました。

霧の中でエゾノリュウキンカが、残雪を残した水辺にあり、その葉を雨で濡らし、輝きを増しながら、黄色の花をいっそう輝かせて咲いている様子は、雨の冷たさや登山の苦しさを忘れさせてくれました。

二日目は大麓山の登山から始まり上流部の沢歩き、植樹、枝打ちと盛りだくさんの研修内容でした。

絶景とはいえませんがまずまずのお天気で一安心。

登りながらミヤマキンバエ、ツマトリソウ、イワツツジ、オオタカネイバラ、オクエゾサイシン等、木の名前や花が咲いているのを熊野さんや皆さんに教えて頂き、写真を撮ったりで楽しみながら登る事が出来ました。

今回初めて研究会に参加したのですが、研修のみならず、ボラレン会員の皆さんの勉強熱心な姿に刺激を受け、同室の女性の方々の親切や事務局の皆さんの心使いにも感謝いたします。

また、宮本先生、南部さん宮田さん大変、お世話になりました。  
本当にありがとうございました。

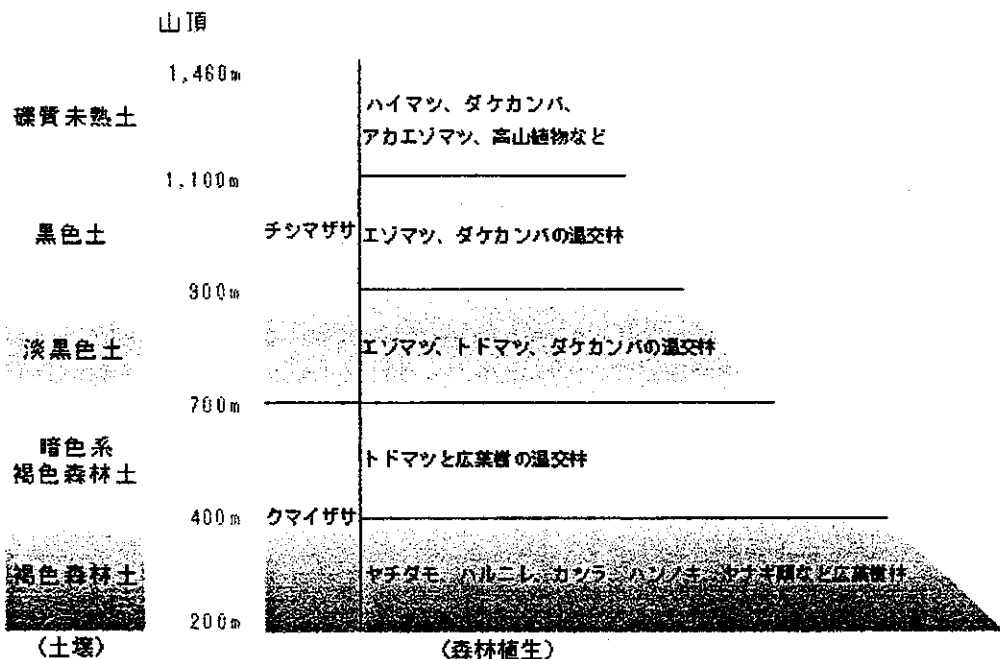


その前に大麓山の話

北嶺の森林植物帯は、冷温帯から亜寒帯に移行する汎針広混交林帯です。演習林内に自生する植物種は、106科379種114変種を記録しています。木本類のうち、針葉樹ではトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、イチイなど4科8種3変種、広葉樹ではダケカンバ、シナノキ、イタヤカエデ、ウダイカンバ、ミズナラ、ハルニレ、ハリギリ、ヤチダモなど42科117種36変種が認められています。草本類は60科254種75変種が認められています。標高700m付近を境に、上部にチシマザサ、下部にクマイザサが分布します。林床の大部分ではこれらのササが密生し、更新の障害となっています。

植栽樹種としては、演習林創設当時はカラマツ、ヨーロッパトウヒなど外来種を植栽しました。近年では、郷土種であるトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツの育苗技術が確立され、主な植栽樹種となっています。(図2)

図2 大麓山における森林植生と土壌の垂直分布 (演習林ホームページ参照)



麓郷地区には、演習林で最も標高の高い大麓山があり、標高に応じた森林植生の垂直分布を眺めることができる。

チドリケマン 以前はナガミノツルケマンといわれていましたが北海道の個体は小さく花びらに小さな突起があるのでチドリケマンという名前になったそうです。「植物の分類・地理」(42巻2号, 1991. 1. 12)誌上で新種として発表され、北海道東部及び中部の固有種で日高、旭川まで分布、東大演習林では2002年の植生調査と2004年の水系調査で別々の場所で数株確認される。類似のツルケマンとナガミノツルケマンは未確認。

そして、この花の学名は「コリダリス クシロエンシス」(*Corydalis Kusiroensis*) といいます。世界共通の学名にクシロの名前が入っているのは、おそらくこの花だけでしょう。

高さ1mを超える軟弱な2年草で他の植物に寄りかかる事が多い、葉は灰白色をおび、2~3

回羽状複葉で小葉は3深裂、裂片には切れ込みが在り、花の長さは1.2cmほどで、花卉は4個、上花卉の距は短く上に反り、下花卉に小さな突起がある。果実の皮は丸まる力で種子を飛ばす。

(新北海道の花参照)

シナノキハムグリハバチ(*Parna kamijoi* TOGASHI)は、潜葉性昆虫です。幼虫はシナノキ、オオバボダイジュ(以下、シナノキ)の葉に潜り、表皮を残し葉肉だけを食えます。そのため幼虫に食べられた葉は、袋状になります。袋状になった葉にはたくさんの糞が残され、幼虫がいなくなっても被害を受けたことがすぐに判ります(写真-1)。袋状になった葉は、6月中旬ぐらいまで樹冠に残ります。そのため初夏なのにシナノキだけが紅葉したように見えます。

シナノキハムグリハバチは、3年周期で大発生を繰り返します。演習林においても、過去に5回(1988、1991、1994、1997、2000年)の大発生が観察され、2003年は大発生が予想された年です。成虫は体長が3~5mmで雌の方が雄より体が一回り大きいです。写真-3は産卵中の雌です。5月下旬、シナノキが開葉するのに合わせて交尾、産卵を開始します。産卵行動は3~4日で終了しますが、その間はシナノキの樹冠には、成虫が群がるように飛び交っています。卵は葉の縁に産みつけられ、1週間ほどで孵化します。幼虫は2週間ほどシナノキの葉の中で生育して、6月中旬になると葉を食い破り地上に落下してきます。幼虫脱出のピークには、落ちてきた幼虫が下草に当たってバラバラとまるで大粒の雨が降っているような音がします。地上に落ちた幼虫は地中に潜り蛹となります。そして、ほとんどの個体はそのままの状態です3年間を地中で過ごします。

シナノキハムグリハバチの被害による枯死木はこれまでに確認されていませんが、3年という短い間隔で被害が発生するためシナノキに蓄積されたダメージは相当大きなものと考えられます。寄生者からの逃避や寄主(シナノキ)へのダメージを軽減して共存をはかっているなどと考えられますが、何故、規則正しく3年周期で大発生を繰り返すのか理由は明らかになっていません。被害が確認された当初は、森林被害と呼べない程度のごく普通にみられる昆虫種の個体群密度の上昇でした。しかし、それが3年周期で繰り返されるうちに、そのつど被害地域、程度の拡大が続きその影響と思われる枝枯れが目立つようになってきました。近い将来、枯死木の発生も予想されます。今後、適切な対策をとるためにも、何故、周期的な大発生を繰り返すのか、その被害がシナノキの生育にどう影響しているのかなどを調査、解明していく必要があります。

(東大演習林ホームページ参照)

#### 演習林で見たトビケラ シロフエグリトビケラ

トビケラ目(毛翅目)はチョウ目の仲間と共通の祖先を持ち、ゆえに蝶に似た形をしています。翅には鱗粉はなく、微毛が生えているのが特徴です。

トビケラの仲間は世界に7,000種知られており、日本にはそのうち340種が生息しています。

しかし、国内で成虫と幼虫の関係が分かっているものは、まだ約111種だけのようです。

幼虫は水生で次の3タイプに分かれます。

- 砂や小石をミノムシのような巣を造り、川底を歩き回るもの
- ミノムシのような巣を作り、巣の前に網を張って捕食するもの。
- 巣を作らず、川底を活発に歩き回る。

幼虫の食性は藻類や腐食物を食べるものや昆虫を食べる肉食性のものがあります。

石英を纏うビケラ シロフェグリトビケラ(白い斑入りの袂リトビケラ)の意

宮本さんは雲母と言っていましたが、確認したところ石英でした。

東大演習林北海道演習林の水系調査(西達布源流部と仙人峡)で確認

菊池大薫(きくち だいろく) 安政2年1月29日~大正6年8月19日 (1855~1917)

東京生まれ。数学者・教育行政官。洋学者箕作秋坪(旧姓菊池)の二男。幕末・明治初期に、2度イギリスに留学し、ケンブリッジ大学で数学・物理学を学ぶ。明治10年(1877)帰朝後、東京大学教授となる。21年(1888)理学博士。23年(1890)貴族院議員に勅選。文部省専門学務局長、文部次官を経て、31年(1898)東京帝国大学総長。34年(1901)第1次桂内閣の文相となる。35年(1902)男爵。41年(1908)京都帝国大学総長。その後帝国学士院長、枢密顧問官。大正6年(1917)初代理化学研究所長。

### <小林さんの“知床岬”の紀行の続き>

「熊の穴」にて船代を払う、3人まで20,000円一人増えるごとに8000円との事、今日の宿泊先を熊の湯キャンプ場として羅臼へと向かう。羅臼にてビールとワインを買いキャンプ場へ、テント設営後安着祝いのビールで乾杯、熊の湯にて入浴、遅めの昼食を取りながら飲んでいると、熊の湯キャンプ場の主が現れて、何が気に入ったのか夕食に招待してくれる。ジンギスカンと焼酎で宴会、他の主や管理人、地元の主の友達まで紹介してもらい、盛り上がる。主は神奈川から来ていて釧路出身、奥さん共々5ヶ月くらい位滞在し、今年で7年位居るそうで、他の主たちも数年滞在しているとの事、熊の湯の掃除を自主的に行い、全てを仕切っていた。お湯の管理、入り方、掃除後の入る時間まで仕切っている。就寝前の一風呂を浴びに熊の湯へ、地元の人がたくさん来ている。朝小便に起きたら主が既に起きていて、朝のコーヒーから朝飯までお世話になる。小雨の中テントを撤収し、ボラレンの研修会場の常呂に向かう。子供達を山仲間へ預け、常呂で別れる。今回の知床岬の旅は山仲間の全面的協力のおかげで達成する事ができ、親子共々感謝の気持ちで一杯です。

#### コースタイム

8月1日 旭川(4:00)→相泊着(10:30)~(10:45)→観音岩(12:35)→竹の子岩(13:30)→モイレウシ川(15:35)

#### BC1

8月2日 起床(4:00)→出発(5:30)→剣岩手前「潮位後退を待って出発」(7:30)→メガネ岩、海岸へ攀り。船泊→ペキン川(8:10)→ペキンの鼻を高巻いて→滝川(10:00)→滝ノ下(10:30~40)→(11:05)男滝→(11:09)女滝→(11:20)念仏岩→巻き終わり(12:10)→カプト岩(12:50)→巻き終わり(14:00)→(15:30~40)知床岬→啓吉湾(16:00)BC2

8月3日 起床(4:00)→BC2発(8:20)→知床岬(8:40)→羅臼側浜(9:05)→最終番屋(9:27)11時まで待機→帰船(12:10)相泊→(13:00)羅臼

# 地球温暖化は現在進行形！

七飯町 岡村 敏夫

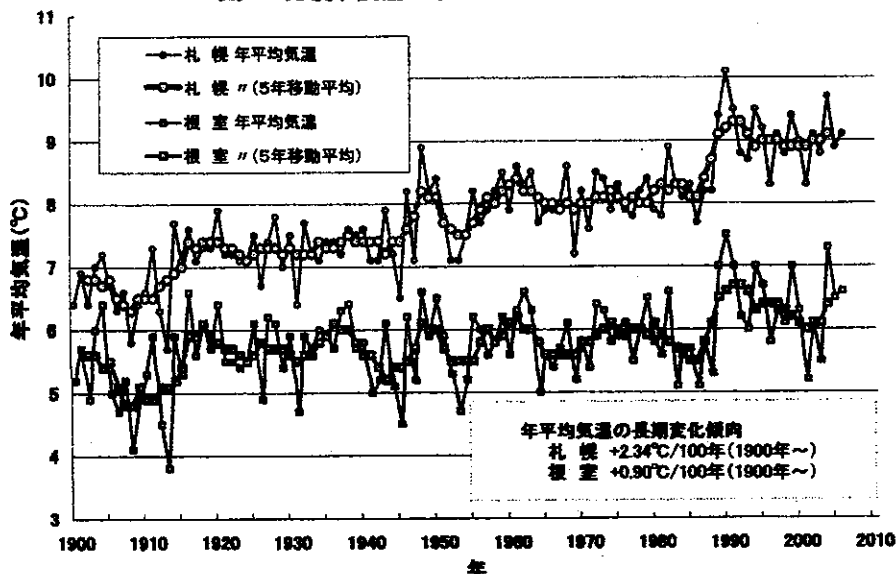
「わしらが子供の頃の北海道の冬の寒さはこんなもんじゃなかった」と年配の方が話すのをよく耳にするし、平成18年の佐呂間町のたつ巻等、今までとは何かが違う北海道の異常気象の頻発に「地球温暖化のせいでは・・・」と巷の話題になることも少なくない。

本当に地球温暖化は進んでいるのだろうか。答えは yes である。気象庁によれば世界全体の年平均気温は1880年以降、100年あたり約0.74℃の割合で上昇、日本の年平均気温は1898年以降、同じく約1.06℃の割合で上昇しており、このような長期的な気温の上昇傾向には、地球温暖化の影響が現れている可能性が高いとされている(参考文献)。

私たちの身近で、今、何が起きているのだろうか。100年を超える気象観測データの蓄積がある道内の2都市、札幌と根室の年平均気温の長期的な変化傾向を見てみよう。2都市とも変動を繰り返しながら長期的には右肩上がりの傾向をはっきりと示しており、100年あたり札幌では2.34℃、根室では0.90℃の割合で上昇している(図1)。

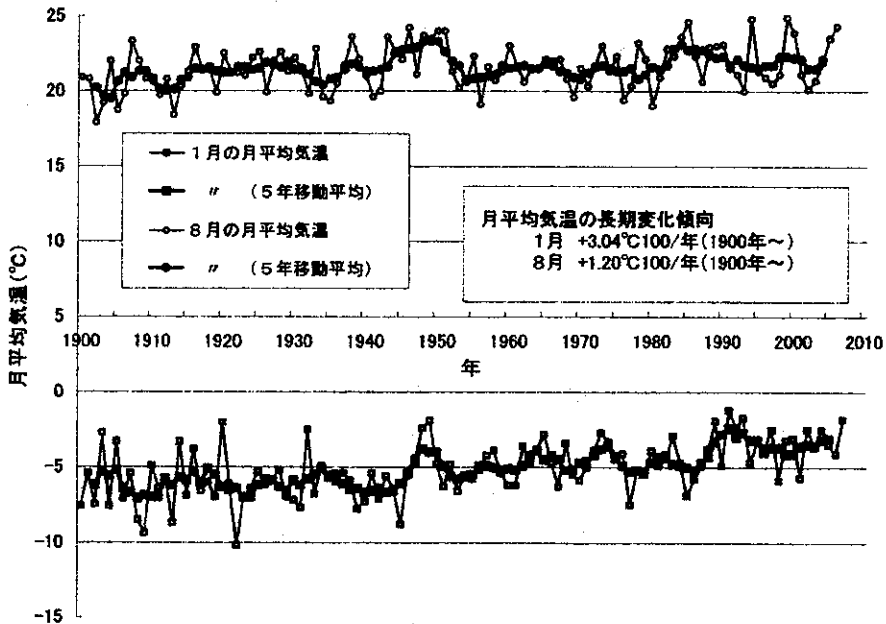
さてこの気温上昇の原因は何なのか。札幌のような大都市では都市化の影響が大きくヒートアイランド現象による高温化が主たる原因と考えられている。しかしながら根室のような都市化の影響が小さい中小規模都市では、地球温暖化の影響が現れている可能

図1 札幌、根室における年平均気温の経年変化



性が高い。前記の日本の年平均気温の上昇割合 (+1.06°C/100年) の算出には、都市化の影響が少なく且つ100年を超える長期の均質な観測データが蓄積されている全国17地点の気温データが用いられており、17地点の中に北海道からは根室のほか網走、寿都の3地点が含まれている。

図2 札幌における1月と8月の月平均気温の経年変化

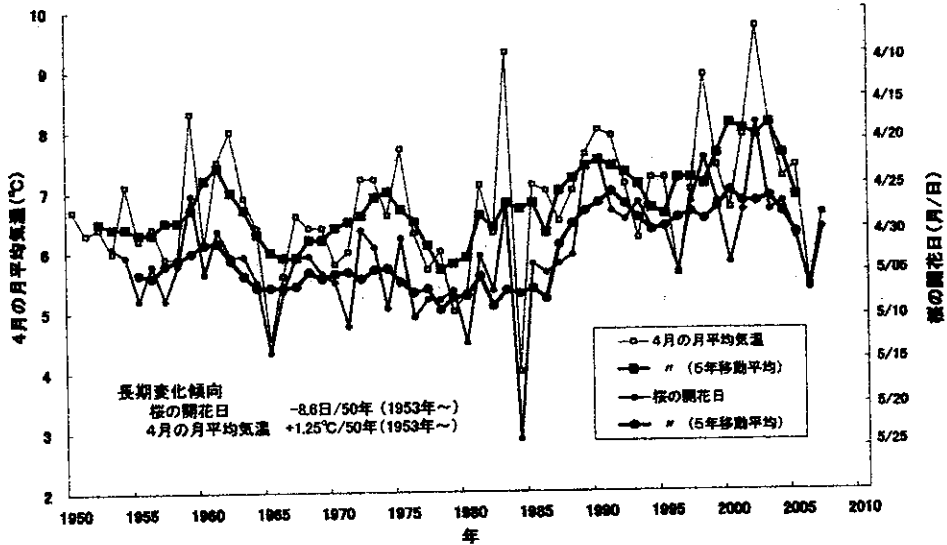


また、気温の上昇は年間を通して均等に起こっているのではなく、夏よりも冬の方が大きいという特徴がある。札幌を例にとると1月は100年あたり3.04°C、8月は同じく1.20°Cで、気温の上昇割合は冬の方が夏の約2.5倍も大きい(図2)。「昔の冬の寒さはこんなもんじゃなかった」という年配者の話しはこの数値からも裏付けることができる。

気温上昇が及ぼす影響の身近な例として、函館における桜の開花の早まりを見てみよう。函館の桜は本州に広く分布するソメイヨシノという品種、調査期間は桜の開花資料が揃っている1953年以降とした。桜の開花は直近(開花前30~40日)の気温の影響が大きいと言われており、ここでは4月の月平均気温と開花日との関連を見てみよう(図3)。図から分るように気温と開花は驚くほど良い対応を示している(気温が高い年ほど開花が早い)。長期変化傾向は4月の月平均気温は50年あたり1.25°Cの割合で上昇、開花日は50年あたり8.6日の割合で早まっている。春先の気温上昇とそれに伴う桜の開花の早まりは函館の都市化の影響に加えて、地球温暖化の影響が現れている可能性が高い。

地球温暖化とそれに伴う海面上昇は生態系、生物多様性、農林水産、水環境はじめ防

図3 函館における桜の開花日と4月の月平均気温の経年変化



災面さらには社会基盤や健康面に至るまで、地球規模で広範囲に影響が及ぶと言われている。世界、日本とも最近50年間の気温の上昇割合は過去100年間の上昇割合を大きく上回っており、温暖化が加速していることを示している。また、気温の上昇は地球全体で均等に起こるのではなく北半球の中高緯度で大きいと言われている。地球温暖化のバロメータ、オホーツク海の流氷が消滅するという専門家の予測結果も出されている。

地球温暖化は遠い未来のことでも何処か遠い国の出来事でもなく、私たちの身近で既に起こりつつある現在進行形の喫緊の課題である。二酸化炭素の人為的な排出量が比較的高水準で推移した場合、100年後の世界全体の平均気温は約2.5°C上昇、日本では約2~3°C(北海道の一部では4°C)上昇するとされている。宇宙船「地球号」の未来のために私たちが今日からでもできることは、温室効果ガスである二酸化炭素の排出を減らすこと、私たち一人一人が問題をきちんと理解して省エネを心がけることである。

### 図の補足

1. 図1~3は気象庁の気象データ(気温)、生物季節データ(桜の開花日)をもとに筆者が独自に作成
2. 5年移動平均とは年々の変化を滑らかにするため、当該年と前後2年を合わせた5年平均値を1年ずつ移動させながら計算する手法。グラフの変化の傾向が見やすくなる等の利点がある。
3. 長期変化傾向とは変化の傾向を「直線」と仮定したときの傾き具合で、直線が右肩上がり(下がり)の場合、符号は+(-)になり、数値の大きさは変化の大きさの程度を表している。

### 参考文献

1. 気象庁 2005、異常気象リポート 2005 近年における世界の異常気象と気候変動~その実態と見通し~(VII)

# ワッカ原生花園観覧会

平成19年8月4日(土)～5日(日)にかけて北見市常呂町宇栄浦、自然の家とワッカ原生花園両施設で行われました。

一日目はあいにくの雨となりましたがカヌー(イカダ)体験を日本三大湖の一つサロマ湖で行われ会員の声が響きわたりましたそのご「夕陽を見よう」は雨が止まず中止になりましたが、自然の家でバベキューを囲みながらの会員同志相互の交流が始まり夜の更けるのもわすれるほどに盛り上がりました。













二日目は降り続いていた雨も観覧会の時間には上がり三百種類を越える花々が咲き誇り数多くの水鳥や動物たちもこのワッカの地に営みを展開しています。ちなみに、ワッカとはアイヌ語で「生命の泉」と言うそうです。

園路沿いに乱れ咲く花を見つけては会員が講師代役になり説明解説員に早変わりと変身しますがボランティア、レンジャーの会員の貯蓄された専門知識の広さに驚きました。

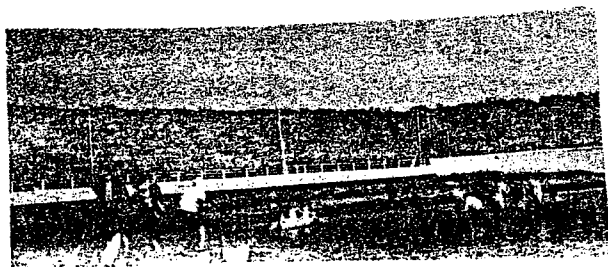
二日間参加していただきましたことに私からもお礼申し上げます。

## Flower Calendar

5月 6月 7月 8月 9月 10月

|  |         |   |   |   |   |  |  |  |  |
|--|---------|---|---|---|---|--|--|--|--|
|  | ハマナス    | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | エソスカシユリ | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | ハマエンドウ  | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | ヒオウギアヤメ | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | センダイハギ  | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | ヤナギラン   |   |   | ← | → |  |  |  |  |
|  | スズラン    | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | ムシャリンドウ |   |   | ← | → |  |  |  |  |
|  | ハマヒルガオ  |   |   | ← | → |  |  |  |  |
|  | スミレ     | ← | → |   |   |  |  |  |  |
|  | エソセンテイカ |   |   | ← | → |  |  |  |  |
|  | ハマハタザオ  | ← | → |   |   |  |  |  |  |

カヌー(イカダ)体験



北見市とん田西町309-3

和泉 勇

(13)

☎ 090-9431-4287

## 観察会に思うことなど

遠軽町白滝 小栗 法韶

7月8日に開催された初夏の森観察会に参加するために半世紀ぶりに野幌森林公園に入りました。

ほぼ50年前洞爺丸台風によって野幌原始林に大量の風倒木が発生し原始林の開放問題がニュースになっていた頃、隣の家もよく見えない北海道開拓時代に残した防風林用地とはどんな所か見に行ったことがありました。雨上がりのとても暑い日で粘土地の歩道にはところどころに水溜りがあり滑って転ばないように注意しながら奥に歩を進め急に視界が明るくなって、札幌市と江別市の境界にあった標識が印象に残っております。

当時私は農業に関係しておりましたので野草は雑草として農業生産の邪魔もの扱いで草取りをしてなかなか枯れないスベリヒユは強害草と敵視していたくらいでした。この頃、農作業の省力化と言うことで、除草剤が世に出始め、効能書きにある雑草くらいは覚えなくてはと植物図鑑を見たりしましたが観察するまでには及びませんでした。

畑の雑草も米糠を撒いて緑肥にしたり、畑に穴を掘って強く踏みつけて埋めると醗酵熱で種子が発芽しなく雑草堆肥になり活用次第では憎めないものです。

実はこの観察会の前日に、勤めていた頃、ある研修会(35年前のこと)で一語になった班の札幌での会合に出席したついでの参加でした。

観察会では解説書、参加者の打ち解けた雰囲気が進められて植物命名の由来など興味を引く幅広い解説で、時間を忘れて楽しい一時を過しました。特に今年が開花の当たり年とされている、バイケイソウを見ることができたのは幸いでした。

8月5日に常呂町ワッカ原生花園の観察会(オホーツク支部と共同事業)に参加しました。勤めていた頃、青年の家には年に何回か入ったのですが、行事の企画に自然観察を取り入れたことは一度もありませんでした。理由は参加者の感心が薄いことと解説する適任者がいなかったことであつたようでした。ワッカ原生花園は、単一の花植物で広大な人工群生地を造成して刺激的な感動をねらった世に言われている花めぐり観光地とは違う静かにじっくりと植物観察する自然のままの花めぐり観光地で、参加された皆さんの会話を聞いているとその知識の深さは、学術調査並ではないかと思われました。花園内の花それぞれがその場その場で精一杯の自己主張をしているようで内陸ではみられない新しい知識が得られました。

私はボラレンの主催する観察会の行事に何度か参加しましたが、大抵の場合、これとは別に会いたい人、ぜひ見てみたい所など他の目的と合わせて参加しております。何年も思い続けていたことが実現できて満足しております。また私のよ



うにほとんど毎日外で一人で仕事をしていると、参加することにより人との出会いも楽しみなものです。そして何よりも観察会の場所、場所の生き物の様子が心に残っていることが財産と思っています。肝心の植物の知識は、覚えては忘れるの繰り返しでさっぱり身につかないのですが、これは日常の心がけと、心して努力しなければと思っています。

できるだけ日常とは違うことをするよう自分に課しております。すこし外に出すぎて忙しい思いをしておりますが、いろいろなことを知ることも大切なことと、こんな生活を続けようと思っています。

<私たちの富良野での研修に関して>

広報「ふらの 8月」に掲載

**東** 京大学演習林で6月29日、30日と「ボランティア・レンジャー(森の案内人)」の自然観察研修会が開かれ、全道から参加した25名が樹木について専門的な研修を受けました。ボランティア・レンジャー協議会の小林英世研修部長は「東大演習林は北海道の本当の自然森林と人工林の比較ができる唯一のところです」と東大演習林のよさを説明してくれました。



東大演習林で自然森林を研修

ズームアップふらの

ま

\* 我が「機関誌」エゾマツ、その親友トドマツ君の嘆き

ト とどまることのしらない地球温暖化  
ド どうなっているか国や企業の対策は  
マ 待つばかりいても仕方がない  
ツ つまらない議論ばかり先走っていて

## 観察会の感想

### 野の花たちが身近になって

水戸 唯則

今年貴団体、ボランティア・レンジャー協議会の観察会に参加しての感想をお話したいと思います。

私は現在河川に関連する仕事をしておりますが、たまたま自然環境に関してヤナギの種子散布から種子の漂着、発芽などを調査する仕事がありました。

それまで植物には少し関心はあったのですが、数あるヤナギの違いを見極めるところまで行き着きませんでした。そんな中、どうしてもヤナギだけでも種を判明したいと思い、樹木図鑑とヤナギに関する本を買って川に生育するヤナギを見ては図鑑と見比べながら、葉っぱの特長や雄花、雌花などを調べ、また種子を採取して発芽させたりしてなんとか少しずつ覚えてきました。

そうこうしているうちに道端や林に生えている身近な植物も気になりだして散歩するときにデジカメで写真を撮って図鑑で調べたりしていました。しかし、自分ひとりだけでは本当にあっているか自信がない状態でした。

そんな折、たまたま子供をつれて野幌のふれあい交流館へお邪魔した時に自然観察会を知って、そこで植物を教えてもらおうと思いました。

そして参加してみても驚いたのは、ボランティアの方たちは植物の種だけではなく、その植物にまつわる話などを詳しくわかりやすく説明してくださることでした。これには本当に驚きました。

私は、ボランティアの方が植物の名前を言われてもすぐには覚えられないので、メモをとったり、デジカメで写真を撮ったりして自宅に戻ってからもう一度確認しています。それでも種類が多かったりすると覚えきれない状態です。

7月下旬に山歩きが好きだったこともあり高山植物を探しに久々に富良野岳に行ってきました。植物を見る目的でこれまで何度も登っていた山を

あらためて登ってみると、その高山植物の種類の多さとすばらしさに感動しました。すべてがあっているかどうか自信はありませんが、約 60 種の高山植物に出会うことができました。

以前はただきれいな高山植物くらいにしか思っていなかった植物が、実は様々な種類の植物があることがわかってきました。それまで見えなかった植物が見えてきて身近な存在になってきました。これは私にとって大きな発見であり感動でした。

最後になりますが、これからも自然観察会でお世話になるかと思います。今後ともよろしくご指導ください。また北海道ボランティア・レンジャー協議会のますますのご発展をお祈りいたします。

ありがとうございました。

#### 観察会の名前、月日

- ① 野幌の春を探そう、3月25日
- ② 森の新緑観察会、6月3日
- ③ 北広島レクの森観察会、6月17日
- ④ 芸術の森周辺観察会、7月22日



## 盆地の雑草の人生

札幌市 浅見 文貴

私は野にひっそり咲く名も知れぬ草花や雑草が激しい風雪に耐え、なおかつしたたかに生き貫く姿に出会う時、なんとも言えぬ感動を覚えます。

それは野幌自然公園でのこと。秋の花でにぎわう森を歩こうとタイトルした、秋の草花探しに初参加し、6キロに及ぶ観察散策もラストコースに到達、もう解散が目の前という時、ガイド役の伊藤秀平先生がふと足を止められ、なぜ四つ葉が生まれるのかご存知ですか。天突く百年記念鉄塔そばに広がるグリーンシートの足元から摘み採った四つ葉をかざしながら、参加者にこう問いかけました。

踏まれても、踏みつけられても三つ葉が四つ葉に化ける“奇形種”。踏まれるほど生命力を培養する、その逞しい生き様に接し過去の雑草人生を誇りに思う私にある種の親近感と共に、計り知れない感動に五体が打ち震えました。

9月13日のこの日は、記録的な猛暑の夏がやや衰えたとは言え、残暑厳しく、しのび寄る秋色に染まりかけた眼下の盆地・札幌が透明感を増す晴天。

百人近くの参加者たちは、10班に分かれ、主催者の北海道ボランティア・レンジャー協議会が各班ごとに配したエキスパートから原生林に自生する草木や時に昆虫類の生態説明も聴きながら、約4時間の林間学習はアツという間に過ぎてしまい、快汗楽しむ中に、早くも次回開催が待ちどうしくなる、魅力に満ちあふれた大自然が織りなす生命たちのドラマ、参加者への救護体制にも心配りしたイベントすべてが同協議会のボランティアで支えられていると聞いて深い感銘を受けました。

周辺連山に囲まれた道都札幌の盆地に住み生きる雑草人生。そのロマンなお楽しみ機会いただき誠にありがとうございました。



## 徳舜瞥～ホロホロ山、登山観察会に参加して

平成19年9月 今 弘子

北海道ボランティアレンジャー協議会小樽支部、北原氏から原稿依頼を受け、YES、と言ってしまった。これには、理由があつて、人間長くやっていると、時として、NO、という場面がいくつかある。野草の会のメンバー参加を断つた一件があつて、負い目を感じていたのである。

さて、主題、山の話に入ることにしよう。

9月5日、早朝5時出発にもめげず、山男、山女達の目の輝き、初めてトライする山への不登、期待感、いくつになつても心踊るワクワク感、日鉄鉱山跡登山口を8時30分に登り始めて30分後、目線上には、ヒロハツリバナやナナカマド等の赤い実、1時間位からとんとん視界が開け、遠くの山並みが、疲れ始めた私達の心を癒してくれまいた。

足元には、ゴセンタチバナの赤く小さい実が、「ガンバ」と語りかけ、暮える気持ちに活を入れ、勇気をもらいながら10時50分、徳舜瞥山々頂に立ちました。

360度の眺望、支笏湖周辺の大パノラマ、洞爺湖、樽前山、罌不死岳、有珠山、尻別岳、羊蹄山などなど、感動の坩堝でした。

そこから、片道40分かけて、ホロホロ山へもトライ、途中エソオヤマリントウの群生が、テッカイトウ…とばかりに、大きくふくよかに咲き競い、私達を歓迎してくれました。

下りは、「頭に注意」「倒木に気をつけて」エトセトラ…と声を掛け合い、リーダーのモットウである助け合いの精神を、ひとり、ひとりが胸に刻みつつ、ひとりの落伍者も無く、25名全員無事下山し、北湯沢名水亭温泉で汗を流し、ビールで乾杯(うめエー)、横目でリーダーを見ると「ほっ…」とした表情でビールを飲んでいたので、印象的でした。

山は最高… 来年も登るぞお…

終











一本の倒木に「エゾマツ」7本、「トドマツ」1本が一行に並んで更新されていた。写真にはみ出て写っていないが更に巨大な「エゾマツ」が左手前にある。木が育たない笹の林床でも一本の倒木が苔むして適度な温床となり、発芽して争うように立派な大樹へと育った。2007年6月30日 東大演習林・研修会にて

## 題：北海道フラワーソンに参加して

北海道ボランティア・レンジャー協議会（略称：ボラレン）

グループ番号：0125 原稿執筆：春日順雄

北広島レクリエーションの森と定山溪地区の二カ所で活動しました。

北広島は16・17の二日間にわたって行いました。

16日は、ボラレン会員9名で実施しました。

17日はボラレン主催の観察会の日でしたから、フラワーソンと観察会を同時進行させる形で実施しました。観察会参加者21名、ボラレン7名、計28名でした。観察会参加者にフラワーソンの趣旨を説明すると快諾。やる気満々で出発しました。参加者の中には、案内者と同じぐらいの知識や観察眼を備えている人がおりました。おかげさまで、一日目の見落としが発見されました。一日目でパーフェクトを期したのですが、大人数の威力は絶大でした。

フラワーソンと観察会の二本立てにした良さは、フラワーソンの意義を、観察会参加者の人たちにも広げることが出来たことです。もう一つの良さは、観察会参加者の自然保護についての関心や識見の高さを垣間見ることが出来たことです。コースには、ランの仲間が見られましたが、ランについていい会話がありました。日本人はランと聞くと目の色が変わるといわれるが、盗掘などは、本当に良くないことだ。「野に咲く花は、野にあって美し」という、健全さの発露は嬉しいことでした。

定山溪地区は、ボラレン会員6名が参加しました。楽しみながらのフラワーソン参加でした。午前中は森林管理局から入山許可書もらい、盤の沢林道沿いの花々の観察を行いました。針広混交林の林縁にはノビネチドリ、ナンブソウが沢山咲いていました。マムシグサとヒロハテンナンショウの違いもじっくり見ることが出来ました。

午後からは八剣山の登山道で行いました。こちらは、山の中なので植物も少し違いコケイランが沢山とエゾノシロバナシモツケが涼しげでした。山頂に近づくとヤマハナソウ、アサギリソウ等の岩場のものがあり、低山ながら楽しみの多い登山でした。



# 北海道フラーソン2007 花の記録用紙 (一般調査)

■グループ番号 [ 0125 ] ■グループ名/代表者 [ 佐藤清一 ] ■調査日 [ 6/16 ]  
 ■調査地点 [ 定山溪 ] ■調査環境(複数可) [ 森林 草原 砂浜 河原 岩場 湿地 (高山) 荒地 人里 ]

確認 [ 76 ] 種 ※花が咲いているものは○、つぼみのものは△、咲き終わったものは×をつけて下さい。

■地区名: 定山溪  
 644131

■前々回: 74 ■前回: 111

|      |             |         |   |
|------|-------------|---------|---|
| 819  | アオチドリ       | ラン科     |   |
| 1238 | アキカラマツ*     | キンポウゲ科  |   |
| 703  | アサツキ        | ユリ科     |   |
| 1810 | アマニュウ       | セリ科     |   |
| 1109 | ウシハコベ*      | ナデシコ科   | ○ |
| 1863 | ウメガサソウ*     | イチヤクソウ科 |   |
| 985  | エゾイラクサ      | イラクサ科   | ○ |
| 1610 | エゾダチカダバミ    | カタバミ科   | ○ |
| 2087 | エソタツナミソウ    | シソ科     |   |
| 2241 | エソニウトコ      | スイカスラ科  | × |
| 467  | エソノウウミズザクラ* | バラ科     |   |
| 1054 | エソノギシギシ     | 鈴科      | ○ |
| 1508 | エソノシロバナシモツケ | バラ科     | ○ |
| 2205 | エソノヨツバムグラ   | アカネ科    | ○ |
| 1169 | エソノレイジンソウ   | キンポウゲ科  | ○ |
| 779  | エンレイソウ      | ユリ科     | × |
| 758  | オオアマドコロ     | ユリ科     | ○ |
| 1840 | オオカサモチ      | セリ科     |   |
| 1430 | オオダイコンソウ    | バラ科     | ○ |
| 1724 | オオタデツボスミレ   | スミレ科    | ○ |
| 2192 | オオバコ        | オオバコ科   | × |
| 1923 | オオバズノキ      | ツツジ科    | ○ |
| 1304 | オオバタネツゲバナ*  | アブラナ科   | ○ |
| 1831 | オオハチラド      | セリ科     | ○ |
| 776  | オオバチノエンレイソウ | ユリ科     | ○ |
| 2216 | オクグルマムグラ    | アカネ科    | ○ |
| 2061 | オドリゴソウ      | シソ科     | ○ |
| 934  | オニグルミ       | クルミ科    | ○ |
| 2504 | オニタバコ       | キク科     | △ |
| 478  | オニツグシ       | キク科     |   |
| 2019 | オニルリソウ      | ムラサキ科   |   |
| 1232 | カラマツソウ*     | キンポウゲ科  |   |
| 1228 | キツネノボタン     | キンポウゲ科  |   |
| 2408 | キバナコウリンタンポポ | キク科     |   |
| 1868 | ギンリョウソウ     | イチヤクソウ科 |   |
| 816  | クゲヌマラン      | ラン科     |   |
| 1261 | クサノオウ       | ケシ科     | ○ |
| 858  | クモキリソウ      | ラン科     |   |

|      |             |         |   |
|------|-------------|---------|---|
| 2199 | クマバソウ       | アカネ科    | ○ |
| 750  | クマバツクバナソウ   | ユリ科     | ○ |
| 1480 | クロイチゴ       | バラ科     |   |
| 1877 | コイチャクソウ     | イチヤクソウ科 |   |
| 2407 | コウリンダンポポ    | キク科     | ○ |
| 1511 | コキンバイ       | バラ科     |   |
| 876  | コケイラン       | ラン科     | ○ |
| 1644 | コマユミ        | ニシキキ科   |   |
| 1300 | コンロンソウ      | アブラナ科   | ○ |
| 821  | サイハイラン      | ラン科     | ○ |
| 869  | サカネラン       | ラン科     |   |
| 818  | ササバギンラン     | ラン科     | ○ |
| 1688 | サルナシ (0カ)   | マダヒ科    | △ |
| 1469 | シウリザクラ      | バラ科     | ○ |
| 1573 | シロツメクサ      | マメ科     | ○ |
| 1043 | スイバ*        | 鈴科      | ○ |
| 1411 | ズダヤクシュ      | ユキノシタ科  | ○ |
| 2491 | セイヨウタンポポ    | キク科     | × |
| 2162 | タチイヌワグ      | ゴマノハグサ科 | ○ |
| 2247 | タニウツギ       | スイカスラ科  |   |
| 2277 | タニギキョウ      | キキョウ科   |   |
| 2369 | チシマアザミ      | キク科     | △ |
| 1258 | チョウセンゴミシ    | マツバ科    | △ |
| 749  | ツクバネソウ      | ユリ科     |   |
| 1634 | ツタウルシ       | ウルシ科    | △ |
| 1745 | ツボスミレ*      | スミレ科    | ○ |
| 1648 | ツリバナ        | ニシキキ科   | ○ |
| 1382 | ツルアジサイ      | ユキノシタ科  | ○ |
| 1640 | ツルツゲ        | モチノキ科   |   |
| 1373 | ツルネコノメソウ    | ユキノシタ科  | ○ |
| 1294 | ナズナ         | アブラナ科   | △ |
| 1498 | ナナガマド       | バラ科     | ○ |
| 1586 | ナシデソバギ      | マメ科     |   |
| 1189 | ニリンソウ       | キンポウゲ科  | ○ |
| 1660 | ネグンドカエデ*    | カエデ科    |   |
| 845  | ノビネチドリ      | ラン科     | ○ |
| 1088 | ノミツヅリ*      | チシソ科    |   |
| 1143 | ノミノフスマ      | チシソ科    |   |
| 870  | ハクサンチドリ     | ラン科     | ○ |
| 1565 | ハリエンジュ (0カ) | マメ科     | ○ |
| 1286 | ハルザキヤマガラシ*  | アブラナ科   | ○ |

予備欄 (上記にない種については、以下の空欄か、「予備シート」に書いて下さい。) プラス15種

|         |   |          |   |         |   |  |  |
|---------|---|----------|---|---------|---|--|--|
| オニシモツケ  | △ | ナニブンウ    | ○ | オオバクネラン | △ |  |  |
| オオウバユリ  | △ | エソイチゴ    | △ | ミツモトソウ  | ○ |  |  |
| エソアジサイ  | △ | ツルニンジン   | △ | クレスユリ   | ○ |  |  |
| レイヨウボタン | × | ウツボクサ    | △ | エソスガシユリ | ○ |  |  |
| カワフタバソウ | ○ | オオヤマオウマキ | △ | ギンラン    | ○ |  |  |

確認 [76]種

※花が咲いているものは○、つぼみのものは△、咲き終わったものは×をつけて下さい。

盤ヶ沢林道  
八剣山西ルート登山道

|      |              |         |   |
|------|--------------|---------|---|
| 2390 | ハルジオオン       | キク科     | △ |
| 901  | ヒトリシズカ       | センリョウ科  | × |
| 2387 | ヒメジオオン       | キク科     | △ |
| 1044 | ヒメズイバ        | タデ科     | ○ |
| 1438 | ヒメヘビイチゴ      | バラ科     | ○ |
| 2036 | ビレハリソウ       | ムラサキ科   | ○ |
| 634  | ピロハデジナンショウ   | サトイモ科   | ○ |
| 2411 | ブタナ (ツルネキ)   | キク科     | ○ |
| 902  | ブタリシズカ       | センリョウ科  | ○ |
| 1632 | ブッキソウ        | ツゲ科     | ○ |
| 2356 | ブランスギク       | キク科     | ○ |
| 1870 | ベニバナイチヤクソウ   | イチヤクソウ科 | ○ |
| 2195 | ヘラオオバコ       | オオバコ科   | ○ |
| 716  | ホウチャクソウ      | ユリ科     | ○ |
| 1257 | ホオノキ         | モクレン科   | ○ |
| 745  | マイヅルソウ       | ユリ科     | ○ |
| 1690 | マタタビ         | マタヒ科    | △ |
| 1114 | マツヨイセンノウ*    | ナデシコ科   | ○ |
| 635  | マムシグサ (ウツクサ) | サトイモ科   | ○ |
| 1855 | ミズキ          | ミズキ科    | ○ |
| 2137 | ミソホオズキ       | ゴマノハグサ科 | ○ |
| 1443 | ミツバツチグサ      | バラ科     | ○ |
| 1092 | ミミナグサ        | ナデシコ科   | ○ |
| 2246 | ミヤマガマズミ      | スイカスラ科  | ○ |
| 1689 | ミヤママタタビ      | マタヒ科    | △ |
| 1572 | ムラサキツメクサ     | マメ科     | ○ |
| 1408 | ヤマハナソウ       | ユキノシタ科  | ○ |
| 1416 | ヤマブキショウマ     | バラ科     | △ |
| 1676 | ヤマブドウ        | ブドウ科    | △ |
| 761  | ユキザサ         | ユリ科     | ○ |
| 1182 | ルイヨウショウマ     | キンポウゲ科  | × |
| 2249 | レンブクソウ       | レンブクソウ科 | ○ |

北海道ボランティアレンジャー  
東大演習林で研修会



道内の森の案内人25人

○：北海道ボランティアレンジャー協議会主催の東大北海道演習林研修会がこのほど、2日間の日程で開かれた。野草、野鳥など、野外観察会などの講師や指導者として活躍している道内のリーダー25人が登山を

演習林の研修プログラムに参加して今後の活動の糧にしていた。  
○：同協議会には約200人が加盟し、道内各地で「森の案内人」として活躍している。5年前から同研修会が開かれており、今年6月に鶴川町で植物観察会、そして富良野で東大演習林研修会がそれぞれ開かれた。

田和恵さんの2人が参加した。一行は初日に富良野西岳の登山を楽しみ、夜は東大演習林セミナーハウスの宿泊棟(麓郷)に泊まった。  
○：翌日は大鏡山の登山を行い、午後からは夕刻まで演習林内で倒木更新など大自然の生態を観察したり、枝払い、そして植樹を行い、有意義な2日間を過ごし、今後の活動の参考にしていった。

<私たちの東大演習林での研修について>

「日刊富良野」新聞に掲載

## ボランティア・レンジャー育成研修会2007 について

広報部 内山恭子

今年からボランティア・レンジャー育成研修会は、主催・北海道立野幌森林公園 自然ふれあい交流館、共催・北海道ボランティア・レンジャー協議会で実施することになりました。会場は講義、実習とも野幌森林公園です。

9月28日午前中は29日、30日のプログラムのための下見をボラレンのメンバーで雨の中行いました。コースはユズリハコース～志文別線～大沢コースの2・7キロです。森の中はすっかり秋でした。午後から受講者はオリエンテーション。酪農学園大学・教授・村野紀雄氏の講義を聞きました。講演テーマは「野幌森林公園」ということもあり30名の受講者とボラレンのメンバーで室内は熱気で溢れ狭く感じました。その後、救急法、リスクマネジメントを学びました。

29日は「ボランティア・レンジャーの活動の実際」と「自然体験活動の指導法」の内容で自然観察会を行いました。1グループ5人です。いつもの観察会なのですがスタートにあたり自己紹介や観察会用グッズを見せたり、「自分が楽しくなければ参加者は楽しくない」など案内人の立場での話しをし、その上参加者が熱心で自然に詳しく、観察会は時間が足りないほどでした。昼食後は「ネイチャーゲーム」と「人と自然との関わり」の内容での自然観察会です。これはふれあい交流館の担当でした。ネイチャーゲームで観察会とは違った楽しい触れ合いができたと思います。

30日午前中は「観察会のプログラム作成と解説方法」の講義と実習です。研修部長の小林さんが体験から具体的、効果的に内容を伝える方法を話され、私達にとりましても改めて参考になりました。それを聞いてからグループごとに外で実際のネタ探しをしました。午後から参加者はテーマの発表に向けてネタづくりです。資料を探し、時間配分や役割担当などグループごとにケンケンガクガクと盛り上がりを見せていました。

いよいよグループごとに実際にフィールドで発表です。持ち時間は10分です。その他のグループは模擬参加者として聞き役です。始めてみるとベテランの人がいたり、折角調べたのに時間切れで全部発表できなかつたり、いつものテーマを違う切り口で見せたり、一方的な説明だけでなく上手に参加者を引き入れたりとグループごとにそれぞれでした。

発表後は良かった点や反省点を受け、ボラレンの先輩からは厳しい指摘も受け次のグループへバトンタッチ。テーマのタイトルは「つる性樹木について」、「秋の虫の演奏会を聞こう」、「森で発見」、「秋の種をみつけよう」、「落葉樹の冬芽さがし」、「秋の中で」でした。

最後には会長の田村さんから「自然を観るということ」でまとめの講義がありました。

- ① “身近な自然をマクロの眼とミクロの眼両方でみる”では全員に葉が2枚入った封筒が渡され、その葉についての具体的な話がなされ皆クイズを解くように話にひきこまれていました。
- ② “スペシャリスト？かゼネラリスト？”では広い知識で森を楽しむことが大事とはなされ、納得しました。
- ③ “自分のフィールドを持つ”では図鑑の活用、グループや組織の活用をはなされ自己研鑽の大切を思いました。

この後、閉校式があり参加者全員に自然案内人のネームプレートと終了証が渡されました。参加者はもちろん私達もごくろうさま、お疲れさまの3日間でした。でも熱心な参加者に逆にいろいろ教えられましたし、大勢の人とふれあい、自然を歩く楽しさを共有できたことは私達の財産です。“これを機会に活動を継続して欲しい”と会長田村さんの話に応えたように、その後の総務・三崎さんの働きかけも手伝いボラレン加入者は17名とのことです。新しい力がボラレンの中で発揮され、活力になることを願います。



作成したプログラムを発表

成田 伸一

イザナギ、イザナミが天の沼矛を使用した場所は、天の浮橋とあり天上界と葦原の中つ国の往来の通路に利用される場所であり、下界の混沌としている状態を天の沼矛でかきまぜ、その渦巻く中に稲の種を投下しこれが後に動物が生存出来る様になったとある。前回に触れた、オノコロ島が出現する過程で両神が天の沼矛で、コウロコウロとかき交ぜたと書かれています。考古学者の間ではこの擬音の表現は、製塩の方法を知っていたのではないかとされ、宮城県の塩釜神社で古代製塩が現在も執り行なわれ、松島の近くの七ヶ浜に御座舟を出し、塩釜神社の神官が海水を汲み、海藻ホンダワラで藻塩焼し三日間煮つめ塩を作る祭礼が夏に実施されているのを参考にしている様です。

イザナギ、イザナミの両神による最初の結婚が、兄と妹とによって語られるのは、世界的にも例が多く、兄妹始祖神話と呼ばれています。

旧約聖書、創世記のノア方舟などもそうした洪水型の神話も、始原以前にいた者達全てが死に絶え兄と妹だけが生き残ったという形で社会的タブー性をクリアしています。

その結果を経過し、十柱余りの神々が誕生し火の神を生むに到り、火傷によりイザナミは神避りて、黄泉の国へと旅立ったとあります。この時ゆまり（尿）より誕生した神にワタムスビでその神の子が、トヨウケビメで豊かな穀物の女神で、伊勢神宮の外宮の祭神であり、アマテラスを祀る内宮に対して、食べ物等を捧げて仕える役割をもっています。

さて此処に、イザナギは大いに悲しみ「いとしいわが妹（イモ）の命を、子の一つ木と取りかえるとは思ひもしないことよ」と嘆き悲しだとあります。

一つ木とは一人の意味で、ここは神の事だが、「子」を数える数詞を「木」で表現するのは、もともと人は上の中から植物の様に生まれたと考えたからで、神や貴人を数える数詞は、一般的に、「はしら」（柱）でありこれも「木」（植物）との関わりとみなされます。

次に、イザナミは黄泉の国（死者のいます世界）、ヨミと言う言葉の語源は、ヤミ（闇）ともヨミ（夜）ミ＝ミは霊格を表す接尾辞）と解釈され用字は中国で死者の世界をいう黄泉を借用。死者の向う黄泉の国は、古事記では地下にある世界と認識されていた様だが、それが古代の人々の普遍的な観念であったとは言えず、最近の考古学では、海の彼方へ行くと考えられていたとみなすべき遺物が多く出上り、地域や時代により様々な他界がありえたはずだが、古事記では、神々の住む高天の原、人々の生活する葦原の中つ国、死者の住む黄泉の国の三つが、天、地上、地下とい

う垂直的な形で構造化された世界観を持っていたと推定されます。

黄泉の国のイメージは、横穴式の古墳における玄室（死者を納めた棺を安置する空間）と羨道（センドウ 玄室に入る通路）から発想されていたと考えられています。黄泉の国を訪れたイザナギをイザナミが黄泉の国に建つ殿の閉ざし戸を開け外に出て会話の結果、黄泉の国の食物を口にしている為、地上に戻る訳にはいけななと言うが、イザナミの熱意により、黄泉の国の領（ウシワグ）ぐ神と話をする間待って欲しいと、その時間中は、私を見ない約束を厳守して欲しいと、閉ざし戸の内に戻った。

その内、イザナギは待ちきれず左のみずら（青年男子の髪型）に指してあったユツツマ櫛（ユツ神聖な、ツマ櫛、爪の形をした櫛）の大きな歯を一つを折り、一つ火を灯し暗い殿の中に入りイザナミの姿は、腐乱しうじ虫がたまり、雷神が八つ、頭、胸、左右の手足と姿があり、ゴロゴロという音がしていた程とあります。

一つ火（殿の中は暗闇だという事がわかり、日本書記によれば、これが一つだけ火を灯すことを忌むもとなつたという）その後、神仏の灯明は二つになつたという。このユツツマ櫛より、昔より竹を素材にした櫛が使用していたことがわかる。これを見たイザナギは恐怖の余り、横たわるイザナミに背を向けて逃げ出したのだが、その時、イザナミはただれゆがんだ顔をイザナギに向け「われに恥をかかせおって」とすぐ様ヨモツシコメに迫った。（ヨモツシコメ 黄泉醜女の意 黄泉の国にいる恐ろしい女達で、醜女とは醜いというよりはパワフルな女性の意）

それで、イザナギは頭に巻いていたクロミノカズラ（蔓草の一種イザナギはその蔓を束ね冠として頭にかぶっていた。これはクロミノカズラの呪力を得ようとする行為）イザナギは頭にまいていたクロミノカズラを取って、後にポイと投げ棄てるとエビスカズラ（山ブドウ）が生えて醜女達はその実をつまんでいる間に逃げたが食い終えると、なおもまた追いかけてくるので、次に右のみずらのユツツマ櫛の歯を引き欠いて後にポイと投げ棄てると、すぐに竹の子が生えてきて、醜女達はまたそれを食べている間に逃げるに逃げたとあり、その内先の八雷神、千五百（ちいほ）の黄泉の国の軍人（いくさびと）を副えて追わせてきたので、腰に十拳の剣を後手にふり、ようよう黄泉つ平坂のふもとに辿りついた時にその坂本に生えていた桃の実を三つ取り待ちうけて投げつけると。怖かったのかみな、逃げ帰っていったとあり、イザナギは桃の実に「汝よ、我を助けたごとくに、葦原の中つ国に生きる、命ある青人草が、苦しみの瀬に落ちて患い悩む時に、どうか助けてやってくれ」と仰せになり、桃の実にオオカムズミという名を授けた。青人草＝土より生える植物（人間）。

桃について、玉木正英の『神代卷藻塩草』（1739年）「追難ニ枝ヲ用フル事延喜式ニ見えたり、云々とあり、昔宮中では、大晦日、殿上人が桃の弓と葦の矢で鬼を射る仕業をし、これを追難とも鬼やらいと称し雷他邪鬼を払う儀式があった。

中国で、6世紀に『荊楚歳時記』に、桃五行之精 压伏邪氣制百鬼 とあり、古くから桃には邪氣、悪氣を払う靈力があるものと信じられていた。

桃のもつ靈力に対する信仰は、こうした中国の習俗に由来したものである。その桃の語源は『東雅』にその実繁き者いふに似て、凡物の多き数にはモトといひ即百なりとあり、万葉古今動植正名、他にも同様に記されている。

なお古代に桃と称したものは（日本では）実はヤマモモ（楊梅）あったとされて居ます。

### ## 忘年会のご案内 ##

忘年会を下記の要領で行います。皆さんの参加を待っています。

1、日時 12月1日(土) 17時30分から

2、場所 北の菜路季 大地

札幌市北区北7条西1丁目 NSSビル地下1階

3、会費 3,000円

\* 申し込みは 総務部長の三崎篤さんまで。電話などをお願いします。

電話 011-772-0563

; 昨年と同じようにハガキなどでの案内は出しませんので、あらかじめ承知しておいてください。

: 締め切りは11月24日(土)まで



# “天塩川 百年の流れ” 追って

—— 先駆者松浦判官の日誌をたどる④ ——

札幌市東区 小 泉 三 雄

三日ぶり ‘ついたぞ’ 「天塩河口」

7月30日午前4時起床、今日の調査は「天塩日誌」にハシクロセイ（蜆）が沢山いるとありそれを探ることである。いよいよ最終コース河口へ向かって6時30分出発。周囲一面湿地帯で実に広々としていて家も点々とあるだけで牛の放牧地になっている。網走の原生花園をおもわせるとても美しい場所だ。ここを観光地にでもしたらいいと思う、バスで乗り入れるのではなく、舟に乗って川を下りながら景色を觀賞するのです。

川幅はますます広がってきた、川岸にはネギの親分のような植物が密生する中に漕ぎ入れた、水面2mほど突き出ているまったく一本の棒のような植物折ってみると中空だ。川の流れはほとんどなく鈍足である、風があり我々を苦しはじめた、流れの速い真ん中を下るのがいいのだが、川の中央は風がいちだんと強いので右岸すれすれに進むさきほどと変わって川面が荒れてきた、痛快でもあるが心細い、流速毎時420m上流の毎時2kmと比べるとまるで静水状態だこのままで行くと到着が夕方になりそうである。国道のサポート隊の距離が離れ過ぎているので交信は不能、3時間下ったが天塩河口らしきものは見えず小高い丘に上陸して双眼鏡で遠望………はるか前方に天塩港がぼんやり見えてきたので我々はがぜん元気づいた、右岸は砂丘となって続いている乳牛の姿も見られるが砂地の牛は何とも奇異な感じがしてならない、さすがこのあたりまで来ると日本第4位の長流という感じが十分味わえる、波だけ見ていると海かと思えるほど広々としていてなかなかの迫力がある。

現在地を調べたら河口まであと5kmくらいなので、昨日までの疲れで漕ぐ手を休めたいが必死に歯をくいしばって漕いだ、距離感はサッパリ縮まらないので気をまぎらすかのような思い思いにうたい出した。

“ほんにつれない天塩の川瀬よ、見える河口になぜ着かぬ” 口から出まかせうたを歌っているうちにサポート隊らしき人影が見える、トランシーバーで蜆のようすを漁師に聞いてもらった、河口一帯に在るとのこと舟を岸に寄せ水に入りバケツで川底をすくい上げたシジミだ。

11時30分河口着後、町役場を訪れ草刈天塩町長に、長谷部美深町長からのメッセージを手渡したあと、探険のもようを語った。



## 変わらぬその姿…正確だった武四郎「紀行文」

幕末、松浦武四郎が天塩の探険の紀行文として残した「天塩日誌」をたどり天塩川流域の調査を志した、私たちの天塩川遺蹟探検隊は1967年（昭和42年）7月30日無事、全行程140km（3日間）の川下りを終えた。

武四郎の天塩川探査に要した日数は往復で24日間1857年（安政4年）6月7日に出発、終始川筋を舟でゆくほかはなく、流域ではアイヌの集落もまれば行くことも行くことも人の背丈を越えるジャングル中、蚊や虻に責められながらの探査では、さすがの武四郎もうんざりしただろう。新緑の季節であり一日60km以上平気で歩き、アイヌ語も話せるほどのスーパー探検家、後年、蝦夷地を北海道と命名するきっかけとなった、彼の足跡を追った調査から「天塩川は昔も今も変わらない偉大な川」です。

### 「松浦武四郎記念館」をたずねて

1995年（平成7年）11月11日記念館見学し探険記事を寄贈

三重県一志郡三雲町（現松阪市）津市の南、伊勢街道沿いに発達した農業の町、一志米の米どころとして知られる。武四郎の生家が小野江地区に現存し、町は1995年（平成6年）7月、同地区に松浦武四郎記念館を開館させた。

武四郎の5代目子孫松浦清氏より305点の資料を寄贈されたのを、2、3ヶ月に一度展示を入れ替えをして順次紹介している。

展示室入口正面の映像ホールでは、旅行家・探検家・作家など様々な面で多才多芸ぶりを発揮した武四郎を紹介しています。展示室には武四郎が著した日誌類・地図類等数多くの関連資料や説明パネルが展示され、ビデオシアターでは、その生涯を追った映像「武四郎の見たもの」を上映しています。

記念館の鈴木恒雄事務局長とお会いし「天塩川百年の流れ“追って”」の新聞記事と美深町恩根内市街外れに建つ「松浦判官探険宿営之地」の標柱の写真を寄贈した。

事務局長さんは新聞記事と写真を展示するので、北海道民にこの記念館を紹介してほしい、将来同館の広場で北海道物産展を開いて三重県民に北海道をPRする計画もあるとのことでした。-完-



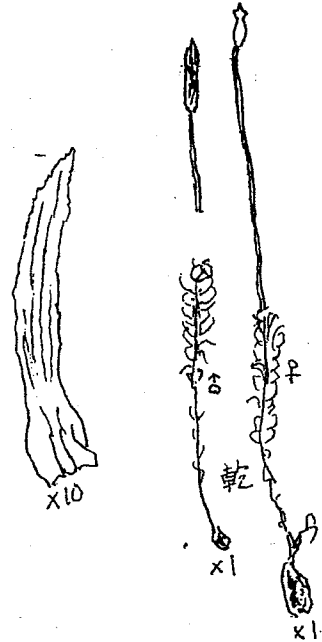
# コケを訪ねて

札幌市 吉田 政徳

四季のうつろいが際立ち、観察会を満喫する輝くばかりの紅葉が目にとび込んできます。目を下に向けると、林床のコケたちは若木が育つ森作りを黙々と続けています。コケの仲間を蘚苔類といますが、これを大別すると茎や葉をもつ蘚類と全体が葉状（茎や葉をもつものものもある）の苔類、葉状の上に角をもつツノゴケ類の三つに分けられます。このコケを同定するためにこれまで高倍率のルーペか顕微鏡に頼りましたが、低倍率（10倍ぐらい）のルーペか肉眼で見分けられたら良いと思います。そこで、コケ全体の姿とその特徴を掘むことにしました。

## ・コスギゴケ 一超エリートゴケ一

このコケはゼニゴケと共に教科書に載る蘚苔類の代表選手です。ゼニゴケが苔類のエリートであればコスギゴケは蘚類のエリートといえるでしょう。直立した茎の高さは5cmぐらいで枝分れはしません。雌雄異株で雌株の孢子体は白い毛をもつ円筒形の蒴を柄の先につけています。雄株は茎の先に五角形の盤状をなしています。このコケは地面に生え、土壌の流出を防ぐ役目をしています。人里に多く、庭や路傍に群生しています。野幌森林公園では啓成高校の近くから公園に入る左の道路の両側に生えています。雌雄の両者は近くにありながら相手のすみ家にみだりに入ることにはしません。節度あるすみ分けに人間も見習わなければなりません。



## ・ネズミノオゴケ一エゾヤチネズミの尾に似ている一

木の根元などに黄緑色の群落をつくります。茎は這い、長さは4cmぐらいです。葉は円形で瓦を重ねたようにつきます。茎の先が細いからネズミの尾に見立てたのでしょう。私はエゾヤチネズミの尾に似ていると思いました。大沢口から50mくらい進んだ右側にハリギリの切株があります。その根元に下を向いて生

えています。

胞子体は茎の間にかくれ目につくことはありません。茎の間は虫たちの安全なかくれ家になっています。

このコケは蘚類のアオギヌゴケ科の仲間です。



### ・ヤマトフデゴケ—筆の穂先に似て

いる—

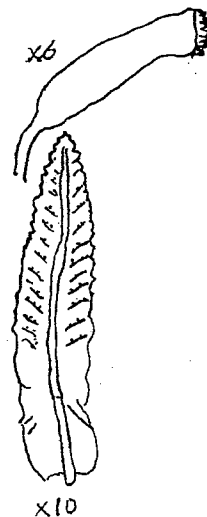
やや日当たりよい岩の上や地面に群生します。茎は立ち上がり5~10cmらしいの高さになります。葉は長さ10mmくらいの針形をなし、先がとがり乾いても縮れません。全体にホウキギを細く小さくしたように見えます。エゾユズリハコースに入り200mぐらい進むと右側にトドマツが数本生えています。コースの溝のふちに小さな群落をつくっています。このコケは蘚類のシッポゴケ科の仲間です。



### ・ナミガタタチゴケ—他人のすみかにもぐりこむちやかりや—

湿った土の上に群落をつくります。茎は直立し、高さ4cmぐらいで枝分れはしません。葉は線形で乾くと著しく巻きまん。

歯のへりには小さな歯があります。葉の表面には横じわがあり、中肋は葉先まで伸びています。葉柄は2~3cmぐらいで葉の先は長くとがり、これを帽といいます。細長い帽子をかぶっているようです。やがてこの帽はとれてしまいます。カワガラスはこのコケを巣材に使っているそうです。このコケは他のコケの中にちやかりすみ込んでいることがあります。コスギコケと同じように土壌の流出を防いでくれるありがたいコケでもあります。



このコケは蘚類のスギゴケ科の仲間です。  
次はアオギヌゴケ、ホソウリゴケ、キヌイトゴケ、ホソウリゴケを訪ねま  
す。

参考図書 日本の野生植物コケ 平凡社  
引用図書 原色日本蘚苔類図鑑 保育社

≧とってもうれしいお知らせ≦

## 今年の育成研修会で 17名の仲間が加入 ##

今年のボランティア・レンジャー育成会が9月28日～30日にかけて行われ、17  
名の方々がわが協議会に加盟されました。とってもうれしいニュースです。

今後は会員になられた皆さんと協力して観察会などの活動を一層盛り上げていき  
たい。

新会員

札幌市 加納勝義 平原昭子 牧、茂 加藤環子 清水邦子 田中一典  
管美紀子 鈴木正江 林福太郎 山田光輝 浜埜静子 原田和彦  
江別市 永井頼恵 永井愛子 村上菜穂子  
北広島市 平村正信  
石狩市 畑中悠二 以上の方々です

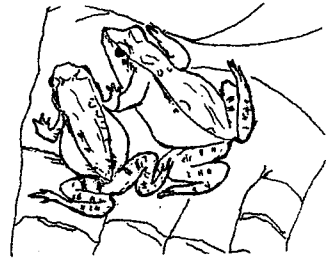
\* 我が「機関誌」エゾマツ、そのエゾマツ君の独り言

エ えいえいと続く北の大地  
ゾ 存分に観察や研修をしてみたい  
マ まだまだ知らないことが多い  
ツ 培(つち) かってきた知的財産もたくさんあるよ

## カエルのこと

苫小牧市 谷口勇五郎

3月の中頃、錦大沼公園の小沼のふちで、カエルの合唱が聞こえて、卵塊が幾つかありました。卵は上から見ると、いつも黒いが、ひっくり返して下から見ると、産んだばかりのものは半分白っぽく、日がたつにつれ白っぽい部分が小さくなり、そして全体が黒く少し大きくなります。まもなくダルマのような形になり、更に尾が作られ、ふ化しオタマジャクシになります。



17年前、娘にせがまれて、カエルを飼いました。オタマジャクシの時はパンくずでも野菜のおひたしでも何でも食べ、誰でも飼えますが、手足が出て尾が短くなりかけると、肺呼吸になり、陸地がないとおぼれ、食物も「生餌」になります。虫かごの中の水を少なくし、陸も作り、おぼれさせずにすんだものの、今度は餌が心配になりました。体に蓄えた養分も少なくなり、オタマジャクシよりも小さくなったカエルが何を食べるか、まさに風雲急を告げる。

私は何年も前からショウジョウバエを飼っていました。与えてみると、あの小さなカエルがハエをじっと見て小さな長い舌を伸ばし、捕らえて食べました。これでまず一安心。

その後小さなミミズやクモを与えて夏になり、2匹を残して卵を取ってきた例の林へ放しました。30分して行って見たら、一匹もいません。こんなに小さいのに迷子になったらと、ふと思いました。ここが彼らの生活の場なのに。

残した2匹を飼い続けました。冬にはミミズを捕まえておいたのも無くなりイカやマグロの刺身を小さく切ってピンセットにはさみ、手の上のカエルの口もとで小さく動かして何とか食い付けさせました。毎日2匹に。

真冬が過ぎて2月の末、毎日ジョギングしている道路側の除雪でもり上がった雪が少し溶けた上に、生きた毛虫(2cmぐらい)が何匹もいました。雪が降ってとけたあとに、何度もいました。私はいつもカエルの餌のことばかり考えていたのです。まったく執念ですね。

こんな風にして3年目、ちょうど雄と雌なので、今度は繁殖させてやろうと欲が出てきました。冬眠しないとダメだということで、60×40×40cmぐらいのプラスチックの容器を買って、土や枯れ葉を入れて、だんだん寒さに慣らしながら、外の物置に入れました。2~3日してふたを取って様子を見ると、枯れ葉の上にちょこんと乗ってこつちをぼんやり見ていました。枯れ葉の一番下に置いてふたををしました。春になって開けて見たら失敗していました。

スケッチは私の手の上の少し肥満気味の我が家のカエルです。

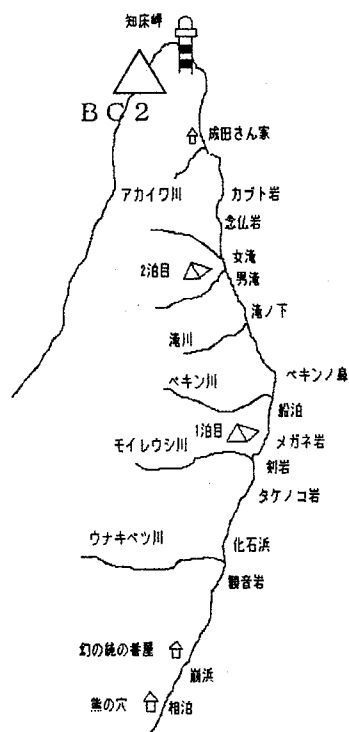
# 知床岬

小林英世

ビックラン北海道と言う観光情報雑誌の創刊号に知床岬へのルート図が確か載っていて、その時から行きたいと思っていたが、なにぶんにも山の会に居たので、岬に行く前に知床岳、羅臼岳等々山々でした。昨年、山仲間が行ったのを基に、息子と行こうと考え、金額を計算すると、車利用でなければかなりの出費となるので諦めていたところ、山仲間が来年行ってもいいとの事でしたので、お願いし実現となりました。

息子と知床岬に行く話をしていた時、学生時代最後の夏休みで、これから就職したらそんなことできないと思し、世界遺産を見たいので連れて行ってくれと娘に言われ、今回一緒に行くこととし、装備等の準備から始まりました。運良く残業もあり、装備、旅費等をほぼ賄う事が出来、家計への負担を軽くする事が出来ました。

7月31日仕事を終え、帰宅し装備の最終チェックをし、何時も旭川に向かう時利用するホワイトアローに乗る。山の会の事務所にて宿泊、8月1日、事務所にて迎え



を待つ。4時10分前に迎えに来てくれる。一路相泊を目指す。途中運転を交替し無事相泊に着く。準備を整へいざ出発。

「キケン道なし」の看板を背に記念写真、入林記入所で名簿に記入、流石知床、記入所の下に熊の糞！始めは昆布番屋の前をコンブを踏まないように、コンブをよけて歩く、番屋が途切れたあたりが崩浜、この辺から大きな石の上をポンポンと飛ぶように歩くようになる。2時間ほどで観音岩に着く、固定ロープを使い慎重に登る。何故観音岩と言うのか登り終えて納得、周りに10数体の観音像、何やら宗教儀式みたいなことをやる所らしい、ウナキベツ川を渡り化石浜へと出る。ウナキベツ川の所に通った人を感知する機械が設置してあった。海岸線のヘツリを繰り返して化石浜へ、番屋を過ぎると今度は巨岩、ロッククライミングの世界、干潮時だともっと岩が出ているのだろうが、海岸線と岩の境を岩のホールドを頼りに進む、竹の子岩の間をとおる、岩のトンネルをくぐり、昇り降りを繰り返して、モイレウシ川手前の20m程の高巻に出る。半分が草付の泥壁、後半が岩、ユマーリングで登る。対岸の下降はそれ程ではなく、降るとモイレウシ湾、10分ほどでモイレウシ川に到着。地元の子供達がキャンプをしている。これがよく云う子供の知床岬に行く探検隊なのか？人が多く

て秘境の感じが無い！テントを離れた場所に張ってくれとの事で、モイレウシ川の横の高台に張る。持参したビールで乾杯、息子に持たしたジンギスカンの夕食を食べ9時就寝。

8月2日4時起床、インスタントラーメンの朝食を済ませ、5時半出発、剣岩手前で潮位に阻まれて前進できず、1時間半待機、この日の干潮11時、7時30分何とか渉れる潮位と成るので、岩伝いに、波を気にしながら進む、しばらく進むとめがね岩、めがね岩の中を進む、ここから海岸線のへつり、へつりの最後に来て、あと10mほどの距離でまたもや潮位に阻まれる。対岸には潮の引くのを待っている男性、彼は海水パンツ1枚になり、荷物を頭の上に乗せ、我々の居る岩の上に来る。一寸手助け、何とか腰までぬれずにすむルートを探し、対岸へと渉る。ここが船泊、しばらく進むとペキン川、眼前にペキンの鼻、なんでペキンの鼻何だ？鼻の穴のように穴が2つあるらしい、だから鼻というらしい、しかしペキンは何だ？アイヌ語の「ヘケレ（明るい）」+「ノツ（岬）」と言う意味。「ひかりごけ」の食人事件の舞台。ペキンの鼻は鹿道に行く、ここも高巻き、鹿道を辿って上に行ってしまう。こちらは展望台？高巻いた直ぐの所をジグザグに降りる。ここからまた、石やら岩やらの上を歩く海岸線。滝川、男滝、女滝と滝に成っている川が続く、滝川で休憩、娘がだいぶ疲れている様子。程なく念仏岩、干潮の11時、海水が完全に引いている。念仏岩横の高巻をしなくても良いのではと思い、海岸線を廻り込んでみると、たった数m切れ落ちて深くなっているだけである。リュックの置き方が悪く大事なビールに穴が開き、リュック内に撒かれてしまう残念。たった数mの為に命がけの高巻き？ちょっとオーバー！しばし休憩、昨年のユニポイントとの事、一生懸命探すがウニが見当らず諦め、羅臼で買った醤油とわさびが無駄な荷物となってしまふ。いよいよ高巻き、足場の悪い泥壁を、イタドリとアキタブキとフィックスロープを頼りにバンドの手前まで落石の危険があるので一人一人登る。私がバンド手前に達した時は、すでに息子は上部泥壁の向こう、娘と山仲間が上部泥壁の下、10mくらいのバンドをフィックスロープを頼りに登る。バンドの下は切り立った崖、緊張が走る。娘、山仲間、私の順に上部泥壁に張り付く、土が滑り登り辛い、娘が難儀している。フィックスロープだけが頼り、やっとのことで登りきる。下りが背丈ほどの崖、ここもフィックスロープに掴まり岩に足を掛け慎重に降りる。後は草付の泥道、4人巻き終わるのに約30分、最大の難所をクリアー。赤岩の港に着く、遣りたい放題の浜、重機で均し、船着場まである。歩くには歩きやすい、息子がルートも分からずにただ海岸線を行く、番屋の親父が向こうは行けないから呼び戻せと声を掛けてくれる。「その谷になっているところを登れ」と教えてくれる。海岸線を息子を追いかけしばし進む、息子はもうギリギリの所まで行って、後は「海に落ちるのも選択肢の一つか」と思ったらしい、無事呼戻し、獣道の谷筋を登る。ここがまたキツイ登り、娘の体力も限界に来ているようだ、ここがカプト岩の高巻き、鹿の糞や熊の糞があちこちに有る。休息の後下降、石雪崩が起きそうな斜面を約200mほど下る。フィックスロープに掴まり、此処も落石の危険があるので一人一人の下降となる。ほぼ1時間かけての巻きとなる。浜に降り休息をして、

最後の浜歩き、遙かに知床岬が見える。巨岩帯から石の浜となり、最終番屋となる。コンブ漁をしている親父に娘が「疲れた顔して、疲れるくらいなら来なければいいしょ」と嫌味を言われる。自分の仕事場にただ遊びで来られては、やはり嫌なのだろうかと思ふ。また、「後2時間だ、頑張れ」とも声を掛けてくれる親父も居た。番屋の犬が案内よろしく着いて来る。イタドリに覆われた鹿道を知床岬の大地へと登る。トウゲブキ、オグルマソウ、ハンゴンソウの黄色一面の原っぱが広がる。やがて知床灯台が見えてくる。鹿道を辿り右往左往する。所々に熊の糞、熊の足跡、おまけに爪痕、少しガスがかかっているの、声を出しながら進む。先ほどの犬がいるので熊がいればいち早くきずくはずなのでチョット安心、やがて灯台下まで来ると顕著な登山道となる。岬の方から何やらエンジン音、近くに行き灯台の電気の為の発電施設のエンジン音と分かる。15時30分知床岬に到着。「ナント寂しい所なんでしょう」と最初に思う。ガスがかかり薄暗いせいもあったからでしょう。先端には植生回復のためのフェンスがあった。生えているのがエゾネギと多肉のヒダカミセバヤが目立っていた。記念写真を撮り、今日のキャンプ地啓吉湾へと急ぐ、此処も鹿道が幾重にもある。湾への降りて鹿の角を拾う、やっとまともな角が拾えて満足、途中で見つけた角はちょっと風化していた。20分ほどで啓吉湾へと着く。先ほどの犬が最後までついてくる。啓吉湾は斜里アイヌ首長「宮島啓吉」に由来するそうです。焚き火禁止なのに焚き火の痕マナーが問われる。此処の岩屋にてキャンプ。水は湾への降りる途中から湧き出していて、岩屋から3分程度で行ける距離にある。岩屋は3つ在り、一番奥は糞尿の臭いがしたから便所に使っている感じなので一番手前の岩屋にする。到着間際から小雨となる、テント設営、水汲みを済ませ、最後のビールで乾杯、呑みながらの食事の準備、今日の夕食はカレーとスープ、娘が疲れやら安堵の気持ちやらかわ不明だが泣き出してしまふ。娘の健闘の褒め、体調を聞き、帰りは帰船と決める。先ほどの犬がテントの横で一泊、物悲しい雰囲気ながら時より人の声が聞え、秘境の感じはするが、ちょっと違う、定置網を仕掛けた漁師が時より来るのでした。

疲れのせい子供達が寝だしたので、早めに就寝。翌日は4時起床、早めに朝食を済ませ、7時40分まで待機。テント撤収後8時に岩屋を離れる。ガスがかかっているの、笛を吹きながら知床岬に向かう。20分ほどで知床岬、鹿道を辿り対岸の海岸線へ、最終番屋の婆ちゃんが犬の話をしてくる。犬も婆ちゃんも人恋しいのかな？最終番屋にて「熊の穴」に電話をしてもらおう、店主留守のため帰宅後の電話を待つ、1時間位たった頃番屋の奥さんが、昼ごろ迎えに行くと連絡が入ったと教えてくれる。11時迎えの船が来る。「本当は干潮でスクリュウが痛むから来たくなかった」との事、大概早朝か夕方に来るそうで、「利用しそうなら行く時に声をかけて欲しい」とも言っていました。船上から昨日一昨日と歩いたルートを見ながら相泊に向かう、船上から見る知床半島はなかなか綺麗で壮大な眺めでした。際を歩いていたので遠望がないので思うのかも、「あそこがああなっていたのか」などルートを振り返る。途中探検隊の子供達の海岸線を歩く姿を見る。それより、台風がそれていて良かったと安堵する。全然天気予報を知らないで過ごしていたからでした。相泊に着き、身支度を整え

\*以下、小林さんの「東大演習林で気になったもの話し」に続く



# 平成19年度 観察会・研修会予定

北海道ボランティア・レンジャー協議会

| 月  | 行事名               | 実施月日                  | 下見             | 集合・解散場所             | 備考 | テーマ         | 当番                    |       |
|----|-------------------|-----------------------|----------------|---------------------|----|-------------|-----------------------|-------|
| 4  | 春の花を見つけよう         | 26日(木)<br>10:00~12:30 | 19日(木) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | 早春の野鳥観察     | 春日・高松                 |       |
| 5  | 春のありがとう観察会        | 13日(日)<br>10:00~14:30 | 12日(土) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | 昼食、ゴミ袋、軍手持参 | 小林・春日                 |       |
|    | 濃屋古道研修会           | 16日(水)                |                |                     | 研修 | 小樽支部と合同     | 田村・伊藤                 |       |
|    | 恵庭公園観察会           | 20日(日)<br>10:00~12:00 | 19日(土) 10:00   | 恵庭公園駐車場集合・解散        | 主催 |             | 小林・橋場                 |       |
|    | 三角山登山観察会          | 27日(日)<br>10:00~14:00 | 26日(土) 10:00   | 緑花会館登山口集合・解散        | 主催 |             | 田村・熊野                 |       |
| 6  | 森の新緑観察会           | 3日(日)<br>10:00~12:30  | 2日(土) 10:00    | 交流館集合・解散            | 共催 | 環境月間行事      | 初夏の草花                 | 小林・高松 |
|    | 鷗川桜草観察会           | 9日(土)<br>~6.10(日)     |                | 鷗川四季の館              | 主催 |             | 小林・門村                 |       |
|    | 北広島レクの森観察会        | 17日(日)<br>10:00~12:30 | 16日(土) 10:00   | レクの森入り口集合・解散        | 主催 | サークル活動      | 伊藤・佐藤                 |       |
|    | 東大演習林研修           | 29日(金)~30日(土)         |                |                     | 主催 |             | 小林・南部・宮田              |       |
| 7  | 初夏の森観察会           | 8日(日)<br>10:00~12:30  | 7日(土) 10:00    | 交流館集合・解散            | 主催 |             | 春日・佐藤                 |       |
|    | 芸術の森周辺観察会         | 22日(日)<br>10:00~12:00 | 21日(土) 10:00   | 芸術の森停留所前集合          | 主催 | サークル活動      | 今村・春日                 |       |
| 8  | 夏の森の観察会           | 2日(木)<br>10:15~12:30  | 7月26日(木) 10:00 | 開拓記念館前集合<br>瑞穂池園地解散 | 共催 | 夏の花、瑞穂池     | 佐藤・熊野                 |       |
|    | ワッカ原生花園、常呂遺跡      | 4日(土)~5日(日)           |                |                     | 主催 |             | 小林・和泉                 |       |
| 9  | 秋の花でにぎわう森を歩こう     | 13日(木)<br>10:15~14:30 | 6日(木) 10:00    | 開拓記念館前集合・解散         | 共催 | 昼食持参        | 秋の花観察<br>熊野・伊藤        |       |
| 10 | 森の匂いをかごう          | 14日(日)<br>10:00~14:30 | 13日(土) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | 昼食持参        | 紅葉・木の実観察<br>小林・春日・田村  |       |
|    | 晩秋の森観察会<br>志文別コース | 3日(土)<br>10:00~14:30  | 2日(金) 10:00    | 交流館集合・解散            | 主催 |             | 小林・春日                 |       |
| 11 | 秋のありがとう観察会        | 11日(日)<br>10:00~12:30 | 10日(土) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | ゴミ袋、軍手持参    | ゴミ拾い、木の実・草の実<br>小林・春日 |       |
|    | 西岡水源地自然観察会        | 23日(金)<br>10:00~12:30 | 22日(木) 10:00   | 管理事務所前集合・解散         | 主催 |             | 荻野・今村                 |       |
| 1  | 円山登山観察会           | 20日(日)<br>10:00~12:30 | 19日(土) 10:00   | 円山登山口集合・解散          | 主催 |             | 三崎・熊野・高松              |       |
| 2  | 藻岩山登山観察会          | 17日(日)<br>10:00~14:30 | 16日(土) 10:00   | 慈恵会登山口集合・解散         | 主催 |             | 佐藤清一・春日               |       |
|    | 冬の森の観察会           | 24日(日)<br>10:00~12:30 | 23日(土) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | 野鳥・雪上痕跡観察   | 佐藤清一・小林               |       |
| 3  | 野幌の春を探そう          | 23日(日)<br>10:00~12:30 | 22日(土) 10:00   | 交流館集合・解散            | 共催 | 芽吹き・野鳥観察    | 内山・小林                 |       |

# 自然観察会のご案内

平成19年9月～平成20年2月  
北海道ボランティア・レンジャー協議会

9月から来年2月までの観察会の日程です。豊かな自然の恵みを感じ、森や山をゆっくり散策しながら自然の知識を学んでみてはいかがでしょうか。

## 晩秋の森観察会 志文別コース

日時：11月3日（土・文化の日）

10：00～14：30（昼食持参）

集合場所：野幌森林公園大沢口  
自然ふれあい交流館

大沢口からエゾユズリハコース・四季美コース・志文別線を歩いて登満別口の森林の家を目指します。往復およそ8キロの徒歩となります。例年、この時期、紅葉が最盛期です。早いものは落葉していますから、落ち葉をサクサクと踏みしめて、いい気分で歩くことが出来ます。昼食は森林の森でとります。

## 西岡水源地自然観察会

日時：11月23日（金・勤労感謝の日）

10：00～12：30

集合場所：西岡公園管理事務所前

この時期、広葉樹はすっかり落葉して、初冬のたたずまいです。見通しが良くなっていますから、野鳥の観察が楽しみです。気候によっては降雪があるかも知れません。寒くない服装で参加してください。

## 円山登山観察会

日時：1月20日（日）

10：00～12：30

集合場所：円山登山口

円山は一年を通して賑やかです。円山は、札幌市民にとって身近な存在です。ゆっくり登れば、誰もが登れる山です。好天の時の頂上からの景色はひときわ美しいです。札幌市と樺戸連山や暑寒別など、雪をいただいた素晴らしい景色が展開します。この時期、野鳥も必ず見られます。登山道は踏み固まっていることが多いので、簡単な滑り止めがあった方がいいです。会として、何個か用意していますので、必要な方は連絡をください。

## 藻岩山登山観察会

日時：2月17日（日）

10：00～14：30（昼食持参）

集合場所：慈恵会登山口

藻岩山は年中、登山者が途絶えることはありません。どんな荒天の日でも登山者があるのには驚きです。でも、冬山ですから、寒さに備えた服装でおいでください。昼食は山頂の休憩室でとります。野鳥は必ず出てきてくれるでしょう。エゾリスやキタキツネの足跡も、かならず見られることでしょう。冬の樹木の観察も楽しいものです。滑り止めがあった方が、上り下りが楽です。会に何個かありますので、必要な方は連絡をください。

※事前の申し込みは必要ありません。

※参加費は保険料として、100円を徴収させていただきます。

※事前の情報は下記へ問い合わせてください。

北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局  
春日 順雄 電話 881-4090

## 編集後記

- ・表紙のすてきな絵「アカエゾマツの植樹風景」は富良野の宮田和恵さんが描いてくれました。多分、私たちが東大演習林で植樹をした様子かもしれません。けんめいに働きながらも何か思慮深いところがとても好きです。
- ・観察会に参加してくれた水戸唯則さん、浅見文貴さんから自然への深い思いやりのあるすばらしい報告文をいただきました。今後とも機会があれば、自然の仕組みなどをともに深く学んで生きたいと思っています。
- ・中ほどにある2ページにわたる写真は、今年東大演習林で佐藤敏幸さんが撮影されたものです。約200年の倒木の上に、樹齢200年位のエゾマツなどが一直線に並ぶ倒木更新です。自然の生命活動のダイナミズムを感じます。皆さんに是非見てもらいたいと考えて掲載しました。
- ・今年のボラ・レン育成研修会は「ふれあい交流館」を中心に行われ、私たちの協議会も野外研修をはじめとして全面的に協力しました。そうした活動を理解してくれてのことかと思いますが、たくさんの方々が入会してくれました。その方々の名前などは24ページを参照してください。
- ・今回、原稿が多く掲載できなかったものもあります。次号にでも掲載したい。
- ・“忘年会”のお知らせの記事もあり、申し込みなど忘れなく。
- ・次回、春季号の原稿の締め切りは2008年1月15日まで、北広島の佐藤まで。たくさんの方の原稿を待っています。

エゾマツ 82号 秋季号

2007,10,19日 発行

会長 田村 允郁